紀乃もくまく

下

W 52-3
Mo 88
2

國立國會圖書館藏

~~22402~~
22713

多行之圖

并受るてにをはの図

四段の活

中二段活

下二段活

打ウツ 待マツ	落オツル 閉トヅル	捨スツル 撫ナヅル
た まんぬじでぞ	ち まんぬじでぞ	て まんぬじでぞ
ち しるけんゆて ちりぬるなきて	しるけんゆて ちりぬるなきて	しるけんゆて ちりぬるなきて
つ ととらしぎらんめり	つ ととらしぎらんめり	つ ととらしぎらんめり
る ようをふまでかな	る ようをふまでかな	る ようをふまでかな
れ どもぞ	れ どもぞ	れ どもぞ

○此行かそ一段の活用なし

本間文庫

四段の活詞

なのら　なゆめら　うら　うがら

から　かゝら　そぐら　けら

そぐつ　そぐら　たら　たら

立

たつ　たゝら　そなら　ゆる

断

ゆぐら　ゆぐめら　まら　まらめぐら

まつ　まら　ゆから

○ゆつ　古今集笹ふわの長長ゆつをからん　六帖五之神

ゆつぐで　後撰集意ゆそぐのゝそぐひつ　金葉集春ふ池之

ひつ　松のこゝなどあり　はて此須九此行の中二段みも活まこ

お能しそこなのあ氏俗なる和これかまこなり

○みつ　古今集より汐みそぎ入めるいそのの　後撰集ふ汐みぎ

あとまきひぎそや　拾遺集恋より汐こそるかどにりかふ又こつ深か

後拾遺集ふ紫こぷ物語藤原君の巻ふ紫こぷ氏物語藤原君の巻ふ紫

かひぷ　やはと云こ又吹上巻より秋こうんと云こ又同巻の

寿よ志和のこぷかれ　源氏物語真木柱よむぬりこぷうちし

て云こ冊後守為忠家百そこ盛忠いなれこぷ　自新の云こなど拾いはこおほし拾てかく多く出せるふ歌詞

中二候りこちこつ　こつる　これともはこ　こく如く思る

にもの法こたる　もそあこぷれたのこぷ　ここ氏法こ

りいくれどもなり又寛喜女御入内屏風にはるべき歌にて

うゑしたのもみちてかぐわしかりしきのふぞ

ゑうるとなほ花ぞ見ハるまてにふるさと飛ていとゝある自

他のはうちなりよくゝわとゝもとゝ

中二段の活詞

此部ゝと俗言ゆきちるゝゝいふ例なり

○いとゝる	おゝる	おゝづる 懼	ゝる
○ゝゝづる	○ゝゝ	ゝづる	ゝづる
○ゝゝる	○とみづる	よゝづる	○ゝゝる

○いとゝる 古事記上巻ふ啼伊佐知流（ナキイサチル） 又下に哭伊佐知流（ナキイサチル）

此あり。こゝにいふ所つるとは、ものゝ名をいふ。されば然ぞうちるといひ、ひとゝは俗言の例なり。続日本紀宣命に荒備流（アラビル）ものゝ名も俗言の例なり。この外かくいふる例なし。

○志ゝゞる　日本紀孝德巻又諸（シヽコヂテ）ニ倉山田大臣於皇太子白云〻　続日本紀宣命小詔（シヽコヂ）治まるとしるくに云〻　字鏡　諸ハ詔也志已豆（シヽコヅ）とあり。はゝかゝづとのゝなりて外の活きえゝざれども、初のまゝよゝ活なり。四段のはゝきにて濁音ヲ也。かゝ活りハ濁るの方多くれどもなり。

○そゝぐる　堀河百首雜ノ部　秋ぞゝぐ　於き素意にそゝぐ

○ゝたる　拾遺集恋又はもとしかの法ゝふひとゝぬ山川の順集

又於わらべらうまでぶらるる被申候 蜻蛉日記ニ紬ぷつる時と
ぎてとそなのぶきしう 源氏總角ニかく紬ぷつるなると 堀河ニ
帝又紬きぬつるも此羽ぶりを結きて用しうたまふ
○もみぢる 万葉十ニ山の將黄變(モミヂ) 古今集ニ秋ぬ
きもとくまれ 新古今ニそよからしれぬもみぢてなぐ狩あり
○とぢる 出雲國造神賀詞ニ弥乎知(イヤヲチ)尓御(ニミ)衣知坐(ヲチシ)云々 万葉
集十七ニしぐれなれ乎知(ヲチ)母(モ)かやくき用せよ 同廿ニ 花ちるなゆ
や乎知(ヲチ)ふさけてとく後の哥に郭公ふぐいすかくれ
これなのわ味ぶかくきありてつ〻つる〻れと
たらぎれどもを氏浜ぶ

下二段の活詞　此活用にてるといふ例あり

あゑる　。あゑる　いぢる　。こゑる　葉

かなづる　とそぶる　まとる　そぐる

たづる　なづる　ゑいづる　へづる

まづる　。ゆづる　。ゆづる

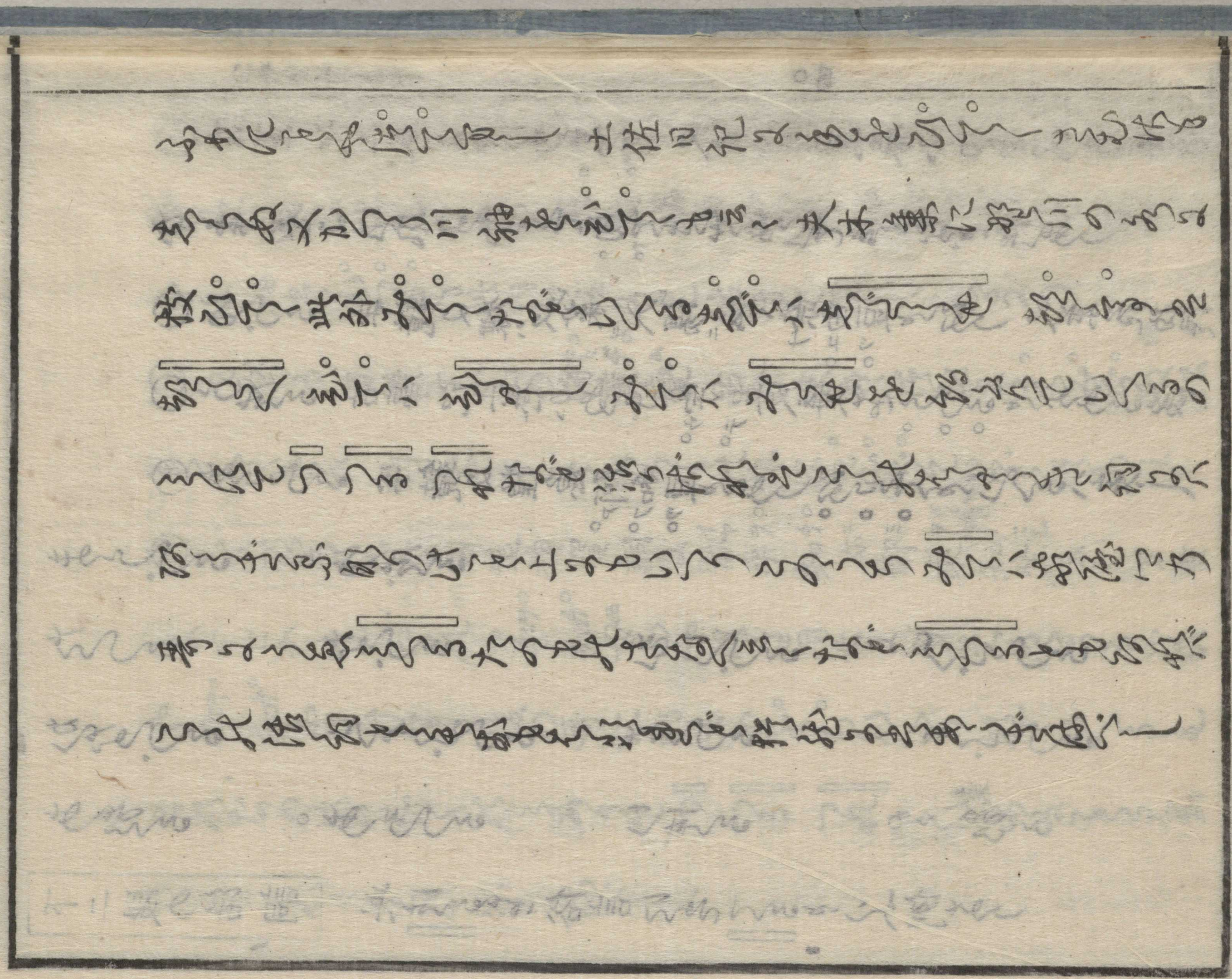
○あらづる　字鏡に惶急阿和豆とあり　ひのそといふるハ誤し

○うたる　古事記上巻かぬぎ宇豆葉をうつるとよめる後

○ゆづる　字鏡に爍以茱ヲ入湯ニ云ク奈由豆と訓り　又茱萸の花

本草巻に出たりやとてゆでそめてくくなど料あり

○古事記上巻に吹きたで　又古今集春の日の



奈行之圖

并受てんをはの図

變格の活

一段の活

下二段活

往イヌル	似ニル	兼カヌル
死ニヌル	煮ニル	来ツクヌル
な	ら	ら
まんぬじでぞ	まんぬじでぞ	まんぬじでぞ
ら	ら	ら
しるんらて	しるんらて	しるんらて
ちゃるぬるなばきて	ちゃるぬるなばきて	ちゃるぬるなばきて
ぬ	る	ぬ
とらしぎんめう	とらしぎんめう	とらしぎんめう
ぬる		ぬる
よをふまでかな	よをふまでかな	よをふまでかな
ぬれ	ぬれ	ぬれ
どもぶぐぞ	どもぶぐぞ	どもぶぐぞ

○此行ふそ四段の活中二段の活なし

○変格の活用を図の上に紀せる往死の用ニツのうち活ぐ〳〵を大位四段の活用ぐ〳〵と切るとぐ〳〵と死用ニツよりこゝの活びニツあり下知の用を称とするかゝし

一段の活詞

ふ法 似

ふ法 煮

下二段の活詞

此ぬるを俗言ハ称るとのふ俗なり

かぬる

かゝぬる

かゝぬる

たゞぬる

たゞぬる

たゞぬる

たゞぬる

ぬる

○ふるぬる　○ふるぬる

○ゆぶるぬる　○ゆぶがぬる

○かゝぬる　万葉十八に防人したちの許登可多祢（ことかたね）もとあゝ

○たゞぬる　万葉五に多（た）ゝ波（ば）たゝえこゝに多何祢（たかね）提（てい）とよゝんり

○たゝぬる　万葉十五に佐（さ）ゝ浪（なみ）のゆくゝゝもみなのがゝるまもこゝあり

多祢（たね）　多祢（たね）さくとゝいゝくり

○ゆぶがぬる　蜻蛉日記に為（ゐ）のぐゝひゝたゞびねなどゝいふこと有り

○そゝぬる　古事記下巻に須岐（すき）婆（ば）奴流（ぬる）母能　万葉集二十

奥津かいゝゝゝ波祢（はね）そ邊津かいゝゝゝ風そねそと有り

○ふゝぬる　日本紀用明巻に摠攝（そうせつ）万機をよゝつぎのまゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

[illegible]

波行之圖　并受るてにをはの圖

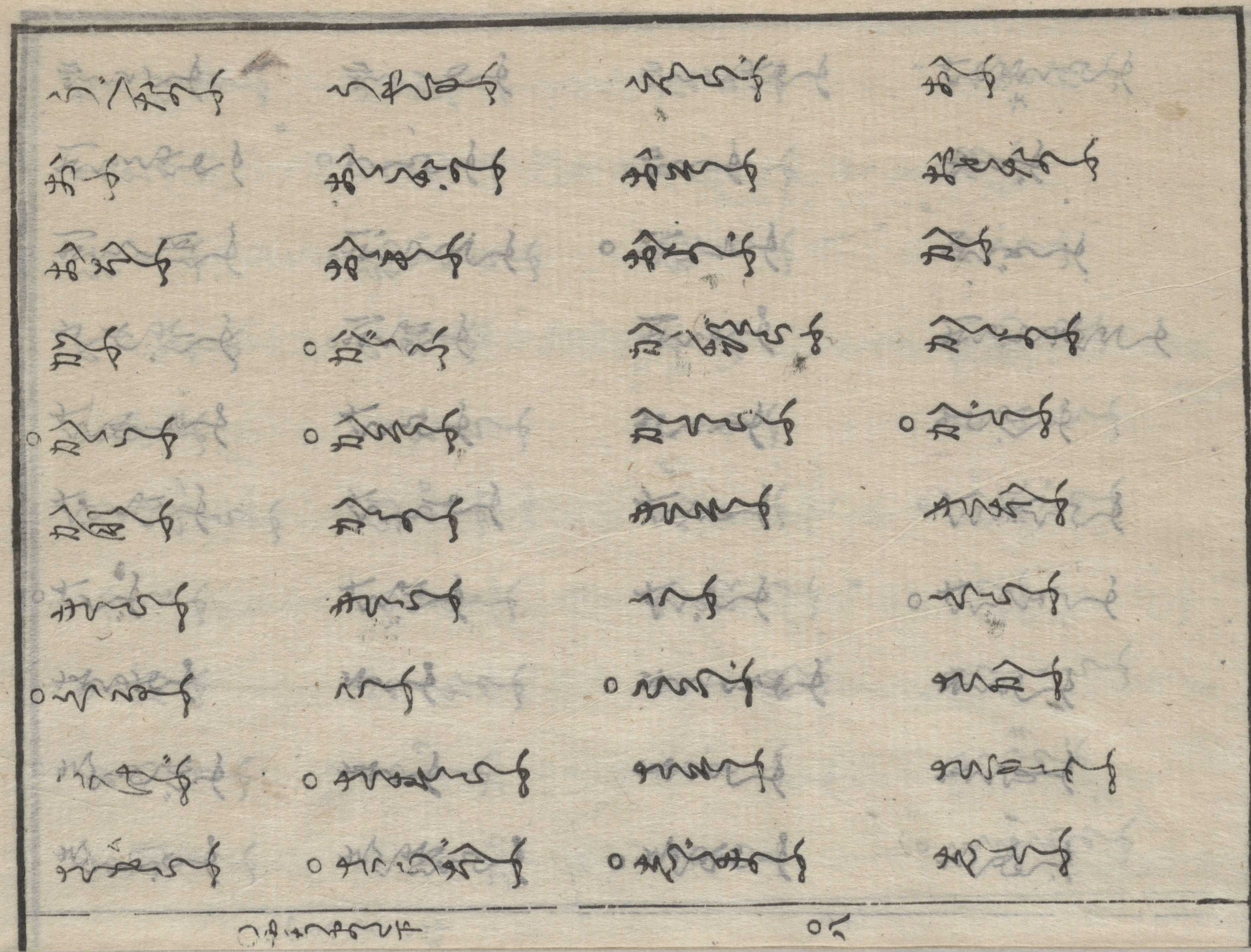
四段の活

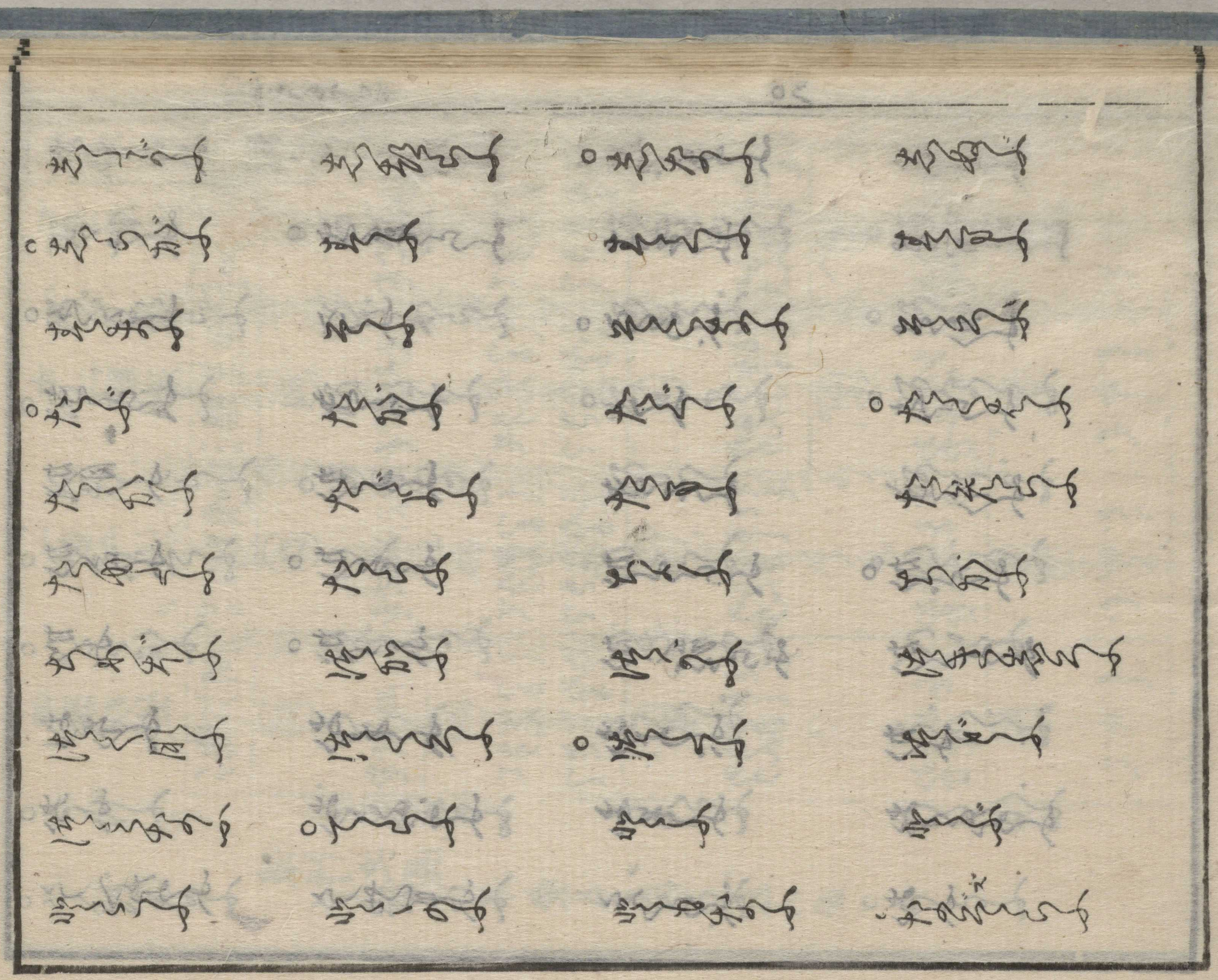
一段の活

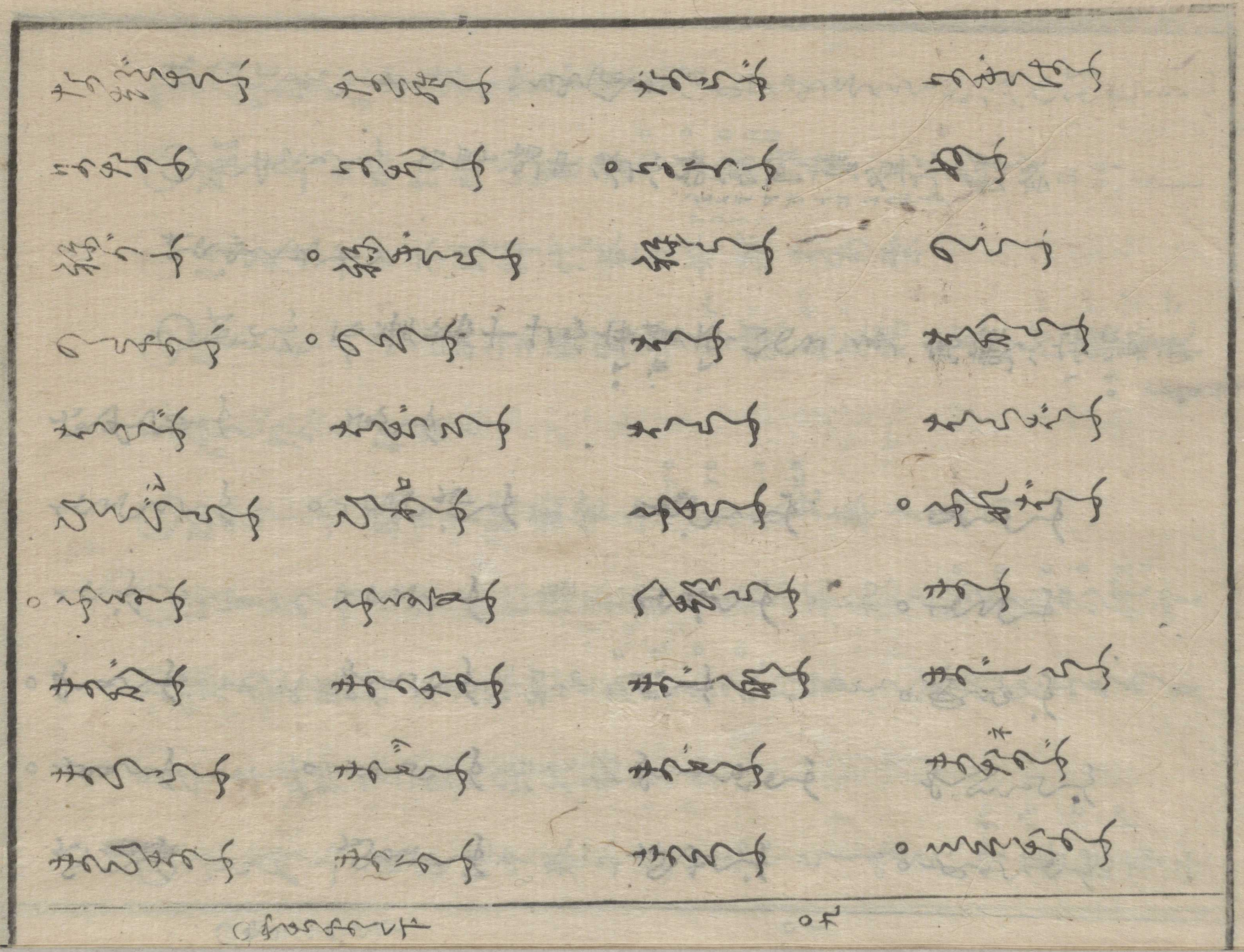
中二段活

下二段活

逢アフ 問トフ	噴ヒル 干ヒル	戀コフル 俛ワブル	加クハフル 辨ワキマフル
は	ひ	ひ	へ
まんぬじでぞ	まんぬじでぞ	まんぬじでぞ	まんぬじでぞ
ひ			
しるぬなきて	しるぬなきて	しるぬなきて	しるぬなきて
ふ	ふる	ふ	ふ
とらぐきんめり	とらぐきんめり	とらぐきんめり	とらぐきんめり
		ふる ヒ	ふる ヘ
ふまでかな	ふまでかな	ふまでかな	ふまでかな
へ	ひれ	ふれ	ふれ
ぢぬじで	ぢぬじで	ぢぬじで	ぢぬじで







むかぶ　むさぶ　むもぶ　もらふ　やらふ　ゆふ　よそふ　よぶ　よらぶ　よらふ

もらふ　やらふ　やしなふ　ゆるふ　よそふ　よぐふ　よらふ　よづくふ

やらふ　ゆふ　よぶ　よらぶ　よらふ　よづくふ

○ひぐふ　万葉集十七ふ安賀布（アガフ）いのちを　字鏡ふ安賀（アガ）布

なぶくあり

○ひぎとふ　古事記中巻ふ始爲阿藝登比（ハジメテアギトヒシタヒ）蜻蛉日記

あ風かまくをたづてをとそくとおもてをそくとぞ人のひぎとふ

やうに書かれぬなどあり

○ひのふ 日本紀神代巻ひのふあるべしかもふとあり

○ひのなふ 日本紀神代巻ひ奸賊(アタナフ)とあり

○ひのもふ 万葉二ひ御軍平安騰毛比賜(アトモヒ)又九ひ阿騰母比(アトモヒ)

などあり

○ひのなふ 続日本紀宣命ひ阿奈奈比(アナヒ)奉とあり

○ひのまのふ 日本紀仁徳巻舒明巻ひ不和をなどあり

よろづあり又應神巻ひ欲和をあまなくたらくとよあり

なほ此行下二段の活れ格なり

○いぶれふ 古事記中巻ひえくまやこ八伊碁能(イゴノ)布(ブ)ぞ

とあり

○いをうのふ　大和物語に　落穴注もの　かうあり

いをうびてなどあり

○うけふ　古事記上巻に宇気布とあり　伊勢物語に

をうなをとうけへでとあり

○うゐなふ　万葉十八に神あひ宇豆奈比　続日本紀宣命

に相宇豆奈比（ウヅナヒ）奉などかあり

○うぶふ　拾遺集に　丹後守為忠家百首に

忠盛こまのこゑのうぶぬるかなかあり

○かぐふ　万葉九に加賀布（カガヒ）嬢歌とあり

○かゝふ　金葉集雜ふかゝふ垣宗の　好忠集にかゝもなど蓬のまゝゝ　堀河百ゝ雑ゝかゝもなる紫の庭　丹後守為忠家百そゝに仲正かゝひてきけるかまつかゝそもなどあり

○カゝそゝふ　古事記中巻掠取其母王（カソヒトリテツノハハノミコラモ）　続日本紀宣命に高御座次乎加蘓毘奪まゝ皇位乎掠　天なとあり又日本紀継體巻ふ捉をかゝそゝひとゝもゝよめあり

○かゝぶふ　万葉十八ふ加多波年かゝも　後撰集春ふ山風の花の香かゝぶふ　なとゝあり

○ゝゝふ　万葉四ふ久流比（クルヒ）　久流比（クルヒ）おもゝゝるゝとゝよゝ

○ゝゝぶ　日本紀神代巻ふ発稜威ゝ嘖讓（フロヒラ）又神武紀ふ詰嘖（タケビコロビテ）之

又万葉十一ふ[illegible]所嘖(コロパエ)地思ふわれを又十四ふ[illegible]
はゝゝ許呂波(コロパエ)要なども行はて此詞中二段の活いとも[illegible]
ゝまで[illegible]ゝ[illegible]中二段の活詞の其筭一の言
よりあ[良]行の下二段の活ふこゝだれるどいふ例なしかゝふ
[illegible]四段の活よりまれば形りこゝだえハこゝばれるあ
○さらふ　大殺詞ゝ佐須良比(サスラヒ)ゝたまひてん　源氏物かゝあ
徳角ふあるまでゝきはまりたまふたぐひ　金葉集慈円
ゆ[illegible]ゝ[illegible]ぴてゝ形ゝあり此詞この行の下二段の活ゝもいたこ
おとゝきこゝとゝあり
○さらぐふ　源氏物ゝ[illegible]ゝ[illegible]ぴ散木寄歌集に

山陰にやせたるにぬさとりおひたなびきてひろく人もの

○志ぶまふ　古事記下巻に匍匐進赴云々　続日本紀宣命

進退たちぶるなどあり

○志ぬふ　万葉三ふまきの丈の奈布せの山まきの十三ふまき

乃四名比はるえて又二十ふたもち之奈布きみうまがうを又

好忠集に尾羽ぞ志ぬふ。

活用志なぬ　志なぬる　志なぬる　志なぬえ　志ぬふ　志ぬれ

こゝに初と今八回し意ときこゆかぐ行も活も異なる回

志ぬなる例なれも異なるこゝあるこゝにはいぶ

のしおくのこゝなり

○えらがふ　源氏竹川巻又ええもゝかびまゝ徳角巻中へ
見えもゝかぶなどあり

○たぶ　続日本紀宣命ハ多婆受（タバズ）とあり又後又たゝびたゝべ
などいゝるハゝびゝをゝる仮よいへるなり

○たくはふ　万葉十九ハ多久波比（タクハヒ）おもてとゝのうはて外又活
きゝるとゝくゝだれバ中二段の活をしかゝ言あかゝだれと
ゝゝたゝまゝのはゝたれバ似ゝれバ先ゝゝ少せゝゝ又おもゝの
此詞ハ又用ゝる下二段の活ゝゝかゝゝゝ

おゝなくを　おゝなくを　おゝなくなどゝいへる此例りゝなゝかゝの中二段
の活のらまつるといふ詞のとゝろふいくるゝとゝなりう考へあゝ
べしあゝどゝを　ゝゝを　おゝなみなどもまれゝらゝなるあゝ
ゝゝを代外四段の活きゝばまゝたいくる例ふし
○活ゝふ　公忠卿よゝたに於ゝくるゝれ井のゝゝ泥羅賦ゝる
○てゝふ　日本紀哥ふ山のゝゝ方ゝゝゝ

かくの如き法きたりて八他のものこれらなどらるるものいとの
行下二段ふなどらふ　などらるる　などらふれ
　　などらく
ものもとそみきたりて他のもれをなどらふるるものとそ
ふるものなかくなるし行ものく法のこの物なるものく
月他ものものをいと多くれどこそいものくまぎらるるこ
なれば法りでにわきものくなるあ
○ふよふ　落窪ふ。ものぴものるふあり
○弥ぎらふ　日本紀雄畧巻ふ「勞軍（ネギラフ）」と訓り
○のろふ　霊異記ふ呪をのろふ。伊勢物語ふあるものをのろふ
てなるものの後びをる月る　枕草紙ものろ月るるものを後びの

まづ〳〵ものなどえたり

○ふるぶみ　源氏初音ふるまひぶみもあるもの又

夫木集に西行法師ものがたりぬにふれぬぶみてものあるこゝ

北海道に見り　万葉二ふなづれふらぶそふれを迎へ

ていまるもの集　鑑

○ふるふみ　舊事記ふるゆらゝかに布瑠部とあり

○みそなふみ　新古今集に神もそらけもあれをえそだのへ

ものなかりあり

○まことふみ　古事記上巻に委蛇（モヨヒキ）又日本紀おもし　源氏菱

かぎろふ〳〵云〳〵　うゑに樓に堂又ふげてふれもそなひ

はゝいけどなどあう

○ゝゝゝふ　日本紀神武巻哥かゝゝゝ

此類も猶ありなどゝくさ〳〵

一段の活詞

ひる干

○ひる噴

○ゐる 和名鈔ふ噴嚏和名波奈比流（ハナヒル）噴鼻（ヒル）也 古今集ふちなのに

ゐぬる風ちぐさなるあり雨ふる雖（ヒル）もそのいろもかはらしぐれも噴（ヒル）と

かゝるし詞なり

中二段の活詞

○あらぶる

○ふるゝ 此ふるゝを俗言ふへひるゝといふ例なり

○ふるぶる

○ふるぶる

○くれふる　おふる
○おらぶる　かぶる
○こふる　こぶる
○さふる　さふる
強
○たまぶる　とまぶる
○のぶる　かたぶる
○まのぶる　むぶる
○ろうぶる　ゆやぶる
○おきたぶる　おたのぶる
○かぶる　くしぶる
○こたらぶる　はぶる
○さのぶる　さたぶる
○たぎぶる　ゆぶる
○ちかぶる　かたぶる
○もちふる　ちふる
○右ふ拳たる外何ぶる。ともふと形あくべし
○ひからぶる　出雲國造神賀詞に赤玉餘御阿加良毘坐とあ（アカラビ）

且此詞 麻 行まで四段の活用なれども此行のみ新しく
此活用なれども此類なほ多くあり
○いなぶる 源氏末摘花ひとびぬ山心して 又若菜かかく
ぶ。ぶ。ぶるを 又総角用ふえまさるいなびでなど所あり
○うぶる 祝詞より疎夫留(ウトブル)まで疎備(ウトビ)などあり これも 麻 行
まで八四段の活用なれども
○うれふる 三代実録より憂(ウ)礼(レ)比(ヒ)ふるあり此詞をつねにこの
行の下二段の活用なるを右のかくあるは四段の活用
格なるべけれど此外より活用したるもえぶれど何まで
しかりとあがたれど四段の活用なるべし これもあ

うれたるじなどいふ言まのかなるをはきいはんべくもかぎんべ
こゝは活るこゝろうれひん。うかんべ。うかんべといふ格なり
かゝるをいふべきはたゞなんぞこゝに入出せる所り但し用ひんは
こゝ二がこゝふ活く初の例但段の活と中二段の活又但段の活と下
二段の活などにこれられあまで中二段と下二段とに活きて用し
こんなるを例なしなれば行但段の活初のたくふといふ下に
いくるこゝろなりこゝきこんこゝ活し

○おらぶる　万葉九ようけび於良毗（オラビ）　日本紀崇神巻ふ味哭（オラビナク）又
雄略巻ふ呼喚（ヨバヒオラビテ）などなるのみなて外に活ぐれぞ四段の活ともも
おもくて行こゝ此活のかゝなるべし

○こぶる　字鏡ニ媚ハ古夫　霊異記ニ媚ハこびとる〳〵　古事
紀上巻ニ媚附（コビツキテ）云〳〵　こゝなり此外ニ活きたるこゝ
ろ多し活用ときこゝろ　漢籍読（カラフミヨミ）みそこゝ
らきばかりにくゝ

○こゝる　万葉三ニいなをいくど強流（シフル）志斐（シヒ）能我強語（シヒガタリ）云〳〵　又
六帖四ニ人ともこゝびしまどなり

○こゝる　和名鈔に聾和名美〳〵之比（ミヽシヒ）又盲和名米之比（メシヒ）　古事
紀ニもあり　こゝれも活きたるこゝろ　されども活用ちがひ

○このぶる　源氏篝火ニおよたづぬまどろまれこゝもうこれこのびて
云〳〵　若紫ニこのびこゝもなくこゝろ　浮舟ニこのびこゝもぬふ

きしまきうんまれ　業花物語うらうれの意より
○きのびさもたふなどもあり　きもいふ羽を第二の意より受
るを井二段の活用かぎりかり風系　きのぶる　きのぶれといふハ
意より意し又万葉十一又不竊隠を古き点より　きのびずて
とよめり活用ハ羽行段より八活きて行ハ全くおなじ
○ときぶる　源氏朝臣の歌　麻
行りて八四段の活用なり行ハ行ふらめて八ら九活用
○たけぶる　古事記上巻ふ建而　訓建云　多祁夫　万葉集十一ふおと
ひ多鶏備てなどなり又日本紀雄畧巻ふ叱をたけぶ　又
○さけび　訓点あり此外ふ活きたるもあるべ

四段の活用なるべきの定めがなしさられば先考えるべき
に初めておきつゝ又ふるえてもいひ辞(テヲハ)を第一の言より
受るを四段の活の格第二の言のめうくるもてゝ格ものれば
たけだけしくもと第一の言よりもいひて四段の活
用なるべしあと第二の言よりもいひてゝ活用なるかく
二ヶやうにたゞみれを四段より中二段ゝ活用なるや
○かくもとぶる万葉十七ふおのゝ海名のゝもきて登母之夫流(トモシブル)
かねとなりてもゝ 森 行きてを四段の活用なるあ
○ゝぎぶる万葉一ゝ桑備(ニギビ)ふしゝゝあり此用を外又ゝ
ばゝまゝどもゝゝ活用なるべし

○祢ぶる　物語書よ祢ぶ。ぶ。ぶ。

例きはゝまもぶるぶ　又夕貞ゝ
まゝぶゝ　ゝゝのぶゝあり

○かやぶる　續日本紀宣命ふ爲夜備（ヤビ）来都利　日本紀継體卷
ふ礼賢（キヤビテ）まゝ跪（ヤビテ）礼なゝ　ありけて又日本紀孝照卷り礼神（ヤブラヲ）ゆく
ゝ三のまるよりて下へけゝぶけてよゝあるゝ四段の活の格ちゝあゝれ
ど此句のゝゝ四段の活の如くゝはあゝびゝゝ活句のゝ
ゝたおゝゝるれどゝゝにおせり用形よゝ考ふべし

○うれしび　かなしび　ゝゝしび　たふとび　えらび　などある
ゝも麻行ゝゝゝ四段のはゝゝき句なゝまで此行ゝゝ形めて人
ゝゝ活き用るべし

下二段の活詞

此ふるを俗にふるといふ例なり

あ	あげる	あげまつる	あげる
あ	あつる	いつる	あつる
お	おちる	おちる	おかる
か	かぢる	かぢる	かかる
か	かさる	くぶる	くるる
こ	こらる	こる	さる
さ	さらる	さぶる	さぶる
そ	そる	そる	たかる
た	たぐる	たぐる	たぐる

なるべし　深舟よはぐかりあ。まぎくるもの　袈衣三又くめも
えぬ。みあ。ぐ。ぐ。於菜花盛終りもなり又　詔詞解り又
敢時止為　末之　豆をあふまつぐ。ぐ。ぐ。

外ゝ[illegible]ゝぶれとも氏活の例ありて

○かゝる竹取物語ふかゝ。たゝりて蜻蛉日記やうてのわたくゝ

かゝ。てきのしぬ業花物語楚王夏の巻りなりくゝかゝ。きうつ

らもあゝりなどのことあるてかゝ||かゝるかゝ||れとくるるあ

たゝぶれともかく活く例ありて又也行下二段の活りてかゝ||

かゝる||かゝれ||かゝえといふ詞ともはゝくべておもふの

ゝる八おゝくゝゝ氏活なりひもゝおのづゝきゝる八也行

の方よりいゝくゝ指ゝゝの活詞なるべし

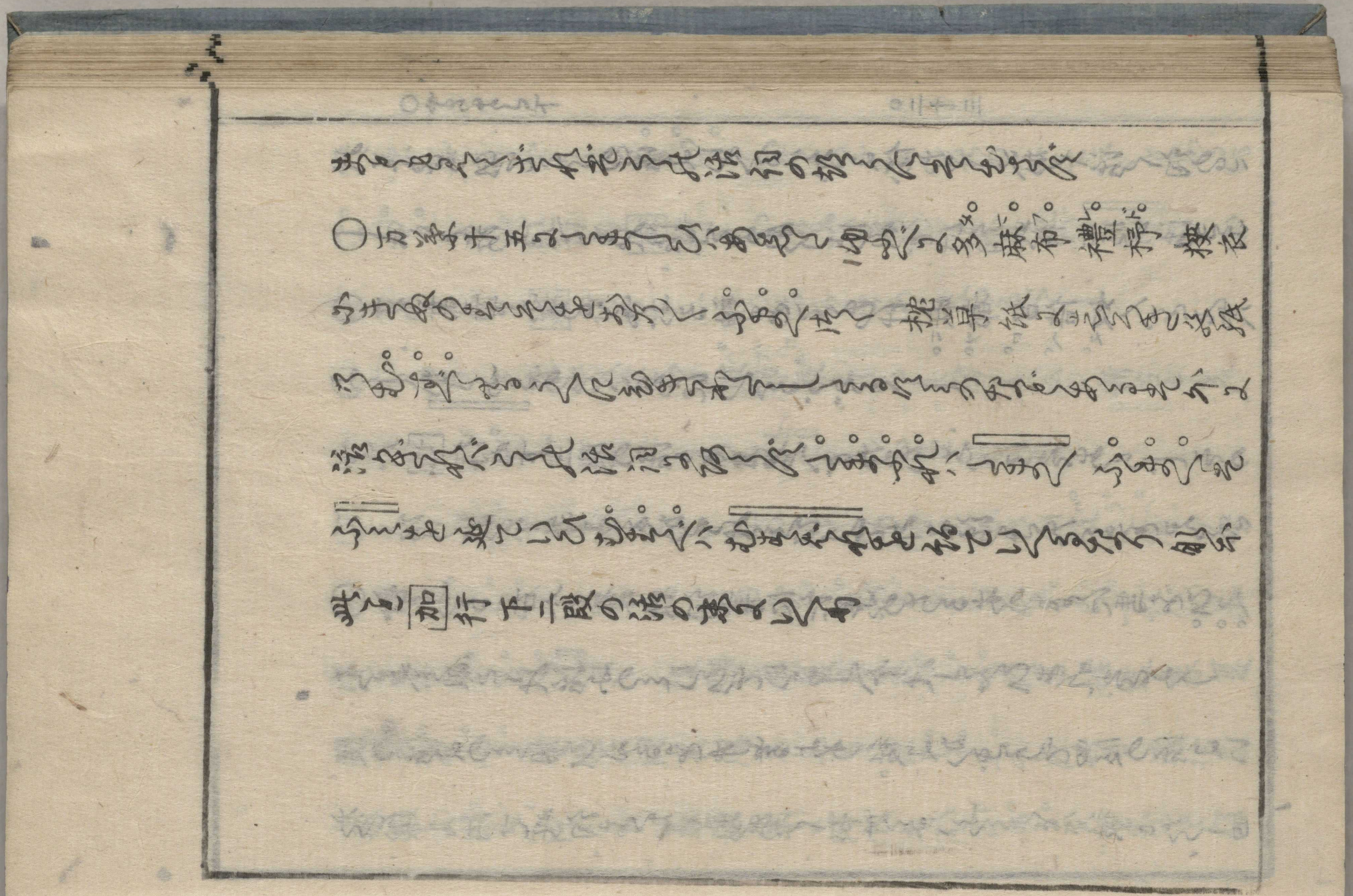
○かゝのかゝる業花物語月宴におゝしかゝ。ゝを云ゝゝ又かゝ。ゝる

物ゝゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

○こらふる 日本紀に慰喩とかりよこらをといへるハ和訓書
よおそれこれを也行ることあらさるべし
○ちくとげふる 竹取物語に心ときめきてとぐべとあり
○きぶる 玉篇に夕されそ治に此のはちを系用
玉ゆりすぶるものなりしとあり
○たふる 源氏物語相壷に見えたまふとかのたふと八老よおしか
○たぐふる 敦忠集にわがぎみをぎふるものをなくたぐへとい
ふるを考へて不用り
○なぶる 蜻蛉日記に侍りけるをなぶとて給ふ歌ハお
しなぶるなのりをしれるをあぐといへるを考へて又うつ和

後撰菓宴 寄かうもりなる人をもとめきて花の枝にとりて
なぶるもりけ行と 麻 行とかよふハもの〻ともなれバ也
けるのこゝにて 麻 行の下二段の活用あゝ伝うべし
○たゝふる 万葉十八 ものゝ波布流こゝろしなく〻ハ云 新古今夏
かもあたゝふるでとゝ行
○たゝふる 万葉十七 中臣のふゝのゆゝことゝいひ波良倍 伊勢
物語 たゝぐ 六帖 かたゝぐ ふるゝ ふるゝを又たゝぐ ふれバ又糸
たゝぐ たゝぐ 後撰 寄簪 及たゝぐ 拾遺 寄簪
にたゝぐ ふるゝを 同哀傷 ふゝ衣たゝぐ 後拾遺
寄雜 はらゝ たゝ 兼盛 寄河 たゝぐ ふるゝ 枕草子 なゝ 枕

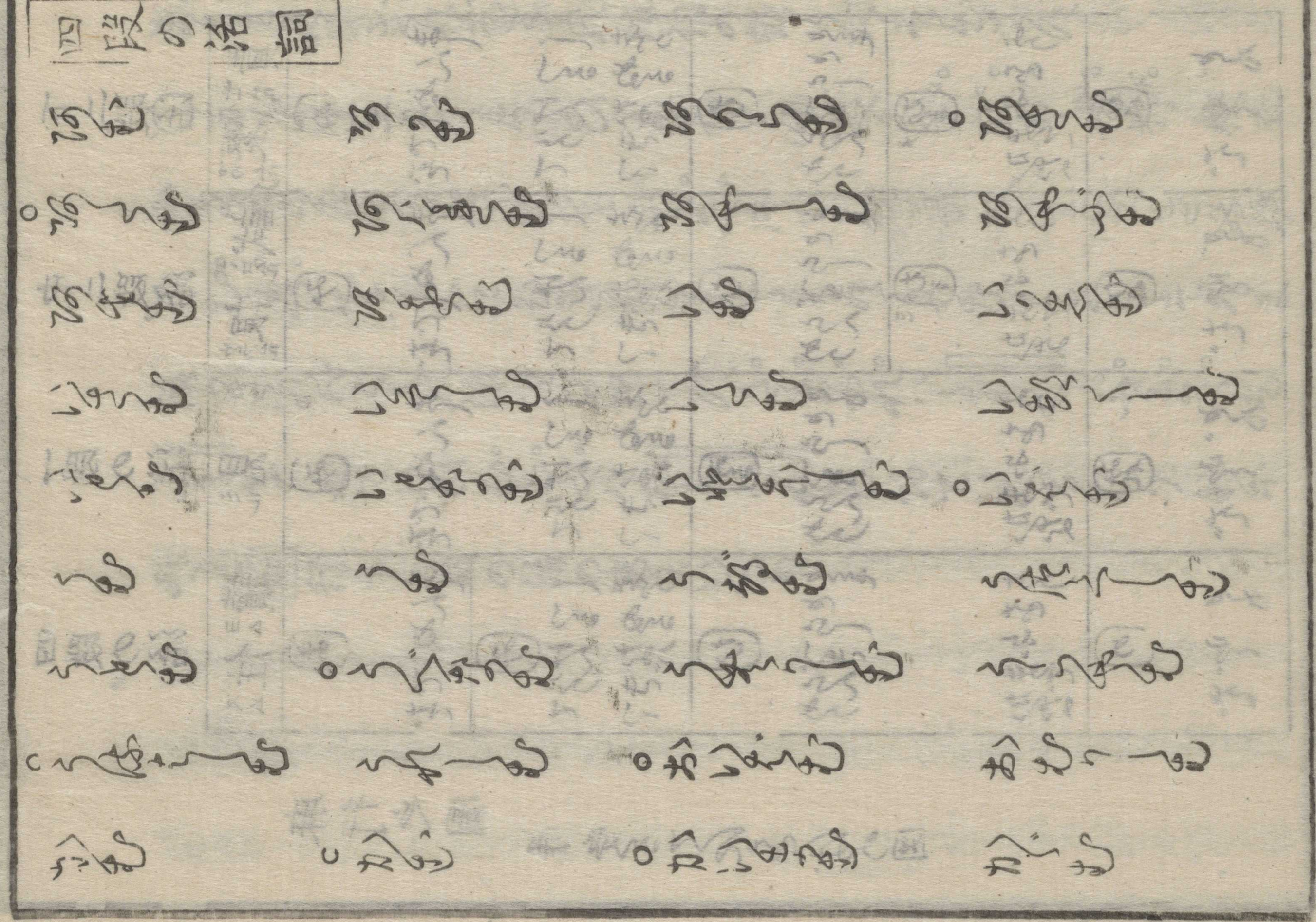
れをかくしたてまつりおくれるハふるくハ後もたく四
段の活用の三段ひるをかぎりとして四段の活用い
たくさんにこれ活用のこいひていはるべきなれどもこの
○むかふる 古今集秋部書に仁徳の御ちるあのもとに馬をひかへ
てとゝのりの外みもかくれたりをかの活用たるをえらぶ
まべ也 行の下二段の活用ともいはるべきなれどもあらじこの
よしかゝふるのこゝろにいくるべきなるべし
○万葉二十ふちもゝふる神をもつて麻都呂倍奴人をもゝ
しゝくもなるハこゝに活用ざるの動詞ばかり活用四段の活用
はもとひてこゝの活用よいくるハ外の伝なく又かく活用のこ

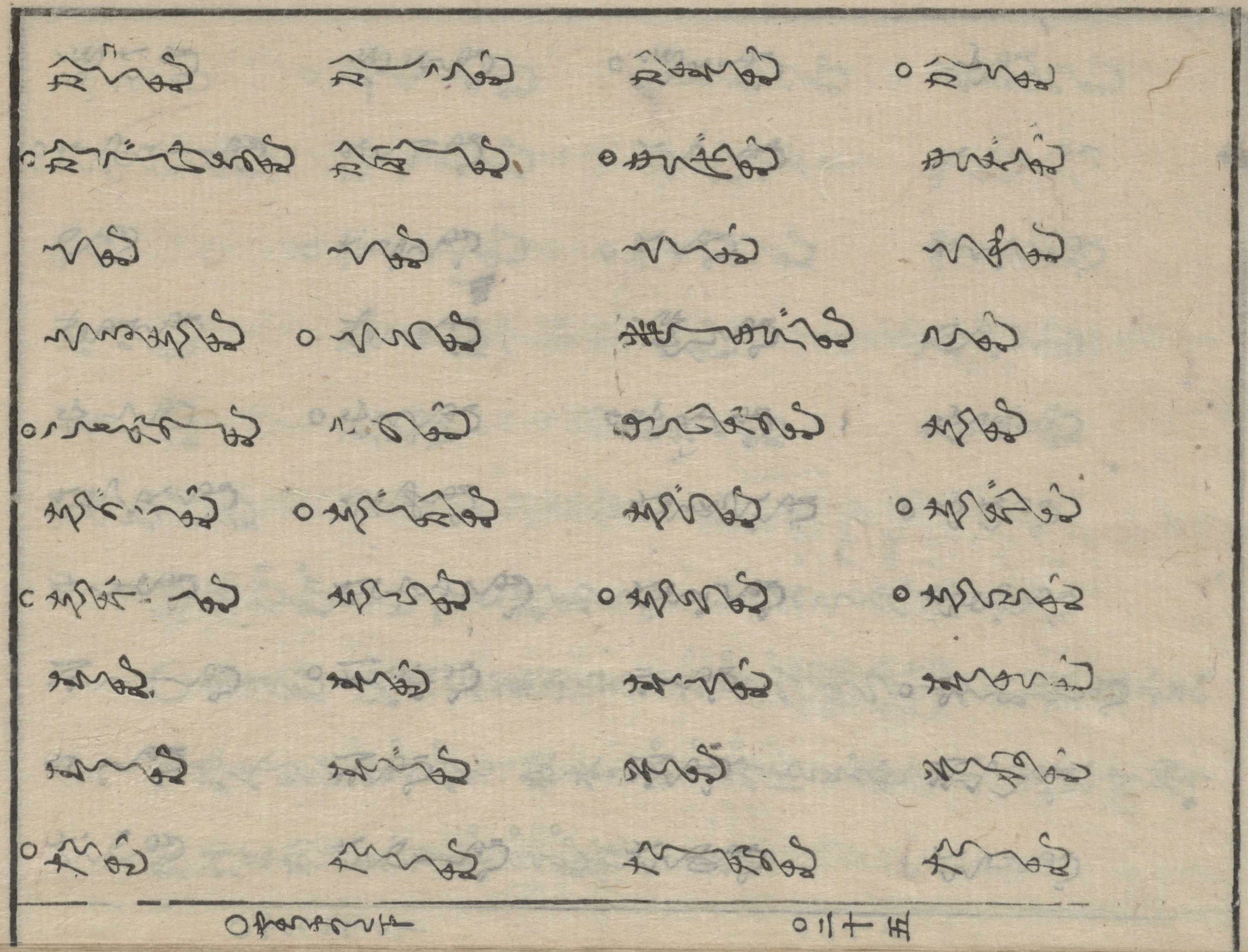


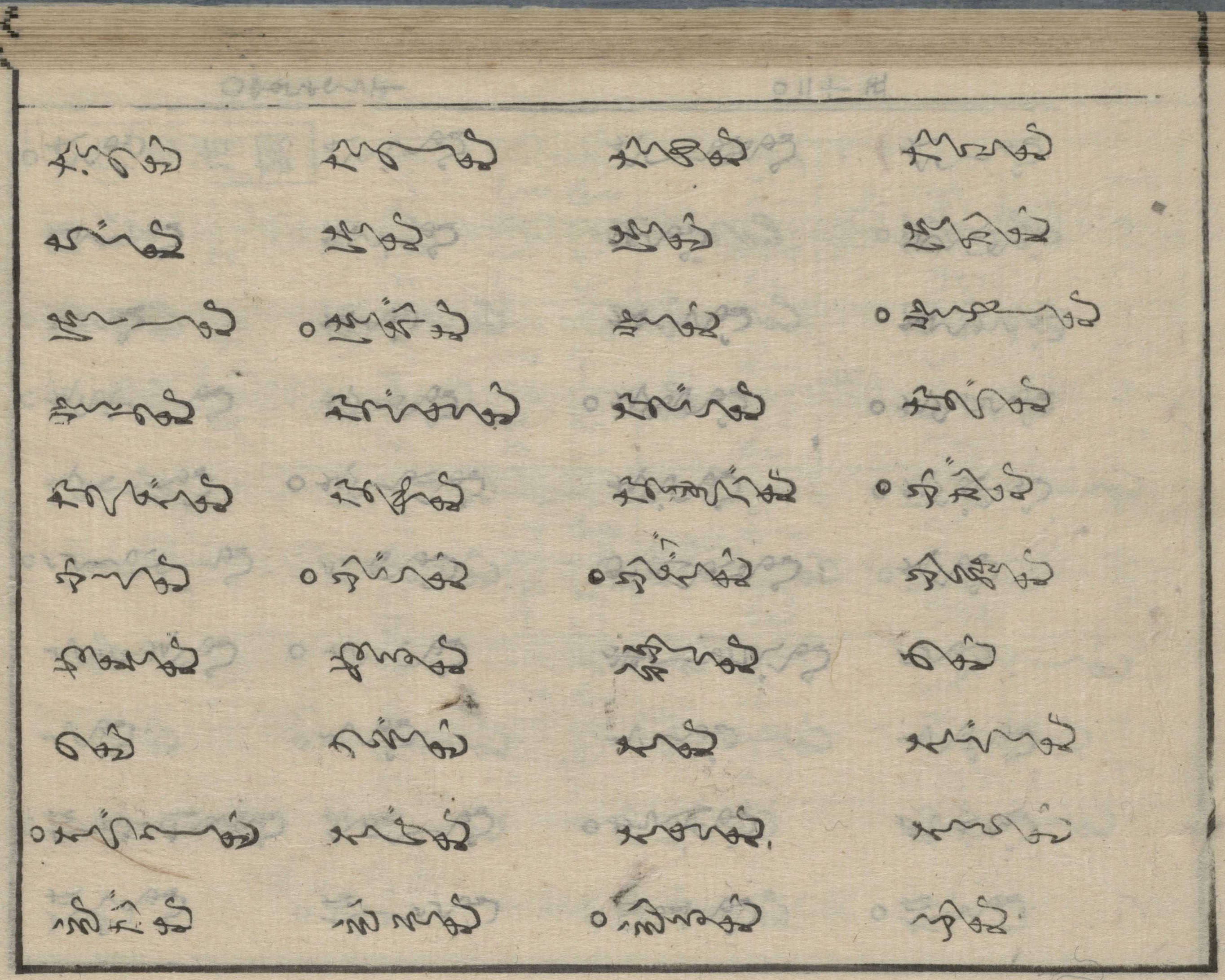
麻行之圖　并受るてにをはの図

四段の活	一段の活	中二段活	下二段活
住スム 讀ヨム	見ミル	恨ウラムル 試コヽロミル	褒ホメル 責セムル
ま	み	み	め
まんぬじでず	まんぬじでず	まんぬじでず	まんぬじでず
み	み		
しるげんゐて ちうぬるなきて	しるげんゐて ちうぬるなきて	しるげんゐて ちうぬるなきて	しるげんゐて ちうぬるなきて
む	みる	む	む
とらごきんめう ともも	とらごきんめう ともも	とらごきんめう ともも	とらごきんめう ともも
		むる	むる
		をふまでかな ようを	をふまでかな ようを
れ	れ	れ	れ
どぶぐで	どぶぐで	どぶぐで	どぶぐで

四段の変語







ふくむ　○ふくぐるむ
かとりぐむ　まどろむ
ふくるむ　むしだむ　やむ
もるむ　やまそむ
○やそかむ　○やそかむ
よどむ　よどむ
ゆるむ　よどむ
きづむ　きづむ
きづむ　きづむ
きづがむ

○何だむといふも狂あるくしなるなる死法ごみり

○あきむ　源氏若菜ふるであきみ　うち物語後藤小天

下北人いひあきみて　狂衣なりみはちどむ　演松中納言

狂言よおだうきあきむなどあり

○あくむ　万葉二又敵見有と訓み代外又活きたるなり

ばかりもこれ活たるなり中二位の活用あり

○いぐむ　日本紀神武巻也聚居之吒聚居此云怡皮弥萎又欽明巻丁

充満ノ充満なり

○こうぐなむ　続日本紀宣命ハ天地乃宇倍奈弥由流之天とあるは

なこれ活なるなり

○こうぶそむ　伊勢物語ハわびもしぐるるみせそとは

なめこうまもとりもしぐるし

○おいぐむ　枕草紙ハおいぐとあり

○かむ　和名鈔ハ揉俗云波奈加無　源氏総角巻又はなかめば

しぐいとらかぶてたなどあり

○かいまむ いせ物語より かいまみてしりぬ 大和物かたりに

かいまみえたる男とあり

○かぶむ 靈異記に新を可陀弥 日本紀又続日本紀宣命に

新(カダム)とあり

○かぶけなむ 続日本紀宣命に辱弥(カヂヤミ)とあり

○きぶむ 好忠集より 折の集もとよりあり

○ぶむ 狩衣より 袴をわらとあり

○ぶれむ 古今集 ぶれしあらみなる

又源氏物語より みなれもあり

○さぐかむ　源氏行幸ふきあるさらしぐふひろうをいとに
ひたなくさぐかみする　枕草紙よさぐかみする髪ふなどあり
○さぐむ　万葉十八よ之保美かれわく
○さぐじむ　源氏明石よさぐじむ者とりて又落をふ
さぐじびなくよしかぞ又夕顔よさぐしみ云く　清水中納
言物語よさぐかんにさぐみする人をそなどらんこう
○さぐ　枕草紙よいさぐさぐみかれてとりあり
○さらさむ　万葉九りよりとかわしはぐも鰹奴　字鏡よ酢を
於毛氏志和年などまり
○たむ　万葉三りおきさしまよ擣回舟ハまくむこのらを

搆轉(コギメグラフネ)小舟又十六ゆきのこと紀多来(ミテ)豆こぎこととなるとあるもの

拾遺抄名ゆきたみてこそいひられあるこゝろなるし

河内中二條ゆきて法師こそ用ゆこゝろ

○ほかむ　今撰和歌集ゆ無真入そこ高校ゆ部ぶ者花ほう

ゆせぶとあ業

○ほそもむ　万葉集十七ゆ部ぶ寺毛(トモ)之美(ミ)し

なゆ用ゆあり

○かがむ　源氏花宴篇ゆ部ぶかがみかゆ　袿衣ゆ部ぶかがみかゆ

なるいくゆ

○やちもむ　日本紀崇神巻ゆ和享(ニギミテ)ゆ部ぶ

○ふぐ(ブ)む　源氏萎ゝふぐるゝぞ　栄花物がたりゝ
ゝなふぐみゝう

○さづかむ　続日本紀宣命ゝ愧美(ハヂカヒミ)とあり

○ゝゝむ　和名鈔ゝ痺俗云比留(ヒルム)無夜(ヤ)末比(ヒ)比活絏と等

○ふくむ　源氏物語ゝ紅葉賀にゝちふくだみゝるびゝ
んぐゝまこゝかのぐゝ所あり

○ゝゝゝぐむ　源氏夕貌ゝみつゝゝみてゝゝゝゝるなり
後撰集雜ゝちゝ川のみつゝゝゝゝゝおいゝゝるゝゝなどあり

○やゝぐむ　古事紀上巻ゝゝ御子ゝゝち不平(ヤノサミ)まゝらし
日本紀神代巻ゝ擧體不平(ヤクサミヱフ)など物あり

○やまかむ　古事記下巻ニ瘦薬（ムナクスリ）とあり

○よゝむ　万葉集四ノ老舌出て與余（ヨム）年とゝもふあんノこゝ

ろのまゝ解

○なゝみ居　なゝみ立（テ）るかぶとゝなゝびてゝこゝ兵法ハ

あゝ又万葉七ノこゝの夜のかげ又將比疑（ナミムカ）とあり此ハ此

行中二段の活ハ活ハ活ハ活ハ活ハ活ハ活ハ活ハ活ハ活ハ

ぞゝふ誤ハまゝるべし

一段の活詞

みる見

○やまゝ下

中二段の活刃

此もの俗にみるとしかり

○うらもの　○うらもの

俗

○あもの　古今集に於くゆあんとてこれ枕草の紙子

ねるまきてなるもの湯きなど能分なり

○うきうもの　狩衣よりうんようあはもあ

ものうみといくるきあり

○うかもの　源氏井川のきはうはて此

○たもの　万葉六ときたもの多武流うら見ゆ又二十か

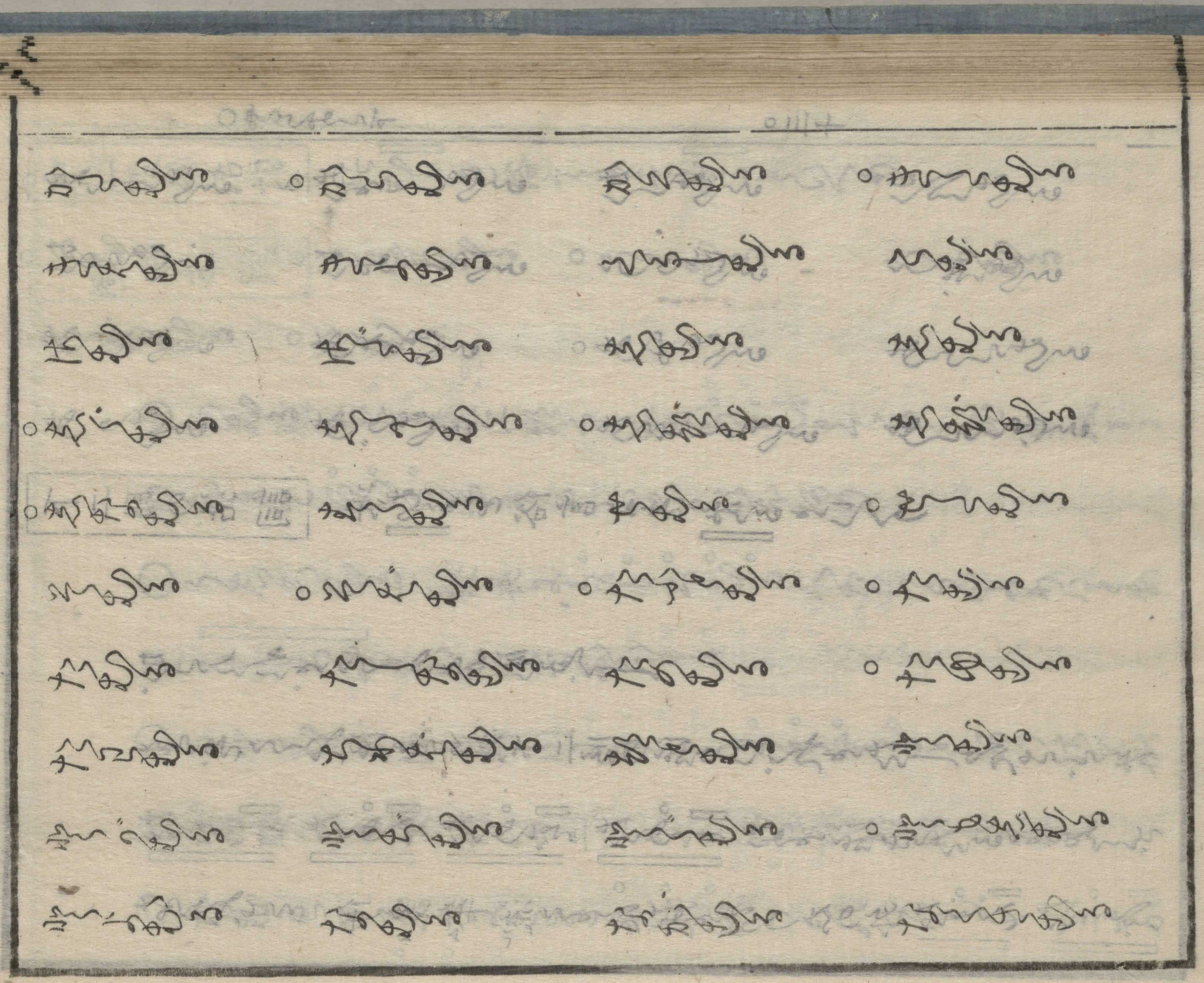
祝此四段のもの波行の中二段のもの活きて皆同じきもの

をもたまき伊多年流ともたなどなりたの外たゝん
たゝじ　たゝめん　たゝめど　たゝめじ　なと活きたゝるべし
まぢこゝ此活きの此下二段の活りいづれとたしうたゝんべし
かゝるがどこゝの方則るべし

下二段の活詞

此むるを俗言まを考るとしうう

あのむる　あげむる　あてむる　あてむる　あて



なぐるもの　なぐるもの　○さもむる
さぐるもの　さぐるもの　○もむる
もむる　もむる　もむる
かもむる　かもむる　○ふのもむる
ゆがむる　○みもむる　やもむる
やもむる　やもむる

○何さもむるといふを聞かれおほせ侍ることなれば、

○あやもむる　堀川百首よりはかなはぬ歌もくんであやもむる

散木寄歌集より恋ともるのはきみにかそへ侍ぬふ人ハ

なやめまもやハ　濱松中納言物語よりまもあいれてまもあてしを

おもひ　あやあて人つまも　ゆくへふるなあはのもあめ

○えもる　万葉二十よりはるかに依志米（エシメ）しとあり

○おもる　源氏桐壺よりおもしをもそなへたく物あり

○からもる　伊勢物語よりからあれよりの落窪物語よ

りかもるやうになどなり

○きたもる　続日本紀宣命よりキタ多米（タメ）あべく日本紀皇極

巻歌よりキタもろもろのかみもろもろ岐（キ）多（タ）麻（マ）須（ス）母（モ）とあり　||　||

の延喜ものがたりに

○きぐもる　源氏行幸よりきぐもるひてんめひて浮舟よりきぐ

きぐめかしくなどいへり

○きぐもる　於遊集雑よりきぐもるとあり

○たなのもる　日本紀崇神巻匿を志たのそんてとふあり

○せそもる　狭衣よりおのうちをとしたのかうさにてせそめこ

又母たうまとせそたのかよりのかきる自とんそうあ

○そそもる　源氏桐壷ふあいなくめをそばめ侍又竹川

にそそそんれともなり

○たふもる　新古今集序よ耳をふそふる物うとの

見このぶるハもるといふよおなじ

○たもる　六帖よ真弓ものかあり　後拾遺集雑ふ君い

そそ思ひめる云そハ淄よ弓をとるもとのねそう

○たのもる　源氏紅葉賀よたのんきあり

○とものもる　万葉ふ十ふ今ゞ永久（トモシム）年べゝや又ユ一ふ目（メナト）莫令多

○たもむる　万葉十七ようち波米（メ）底（テ）とあり又いせあ物語ようち

はめなどとあるたもあハたゝめの詞ゆるしたれどもとハ同し詞

○ゆもむる　源氏繪合ようにあてとなりこれ活用ゆもしゆ

○ふのもむる　万葉二ふ深目手（フカメテ）もゝゝど　古今集ようにふふらあて

おもひそゝんなどとあり

○見もむる　万葉十七ようにミ乏米（ミメ）とあり

○蜻蛉日記ようにはれバてをいのちをたゝもむれとあるもそ新しあ

の迎ハめゝるゆてゝ活用ゆあゝゞ代てと上りゆもへらあ

也行之圖 并受てたをはの図

中二段活

下二段活

オユル 老 ムクユル 報	イユル 愈 サカユル 榮
い まんぬじでず つてきて げんなば るぬる しるのち	え まんぬじでず つてきて げんなば るぬる しるのち
ゆ ぞうらん ぞきらし ぞうらん ぞきらし	ゆ ぞうらん ぞきらし ぞうらん ぞきらし
ゆる イ かなで ふまで をふ よりを	ゆる エ かなで ふまで をふ よりを
ゆれ だず ぞず どぞ	ゆれ だず ぞず どぞ

○此行より巳段の活一段の活なし

中二段の活詞

此ゆるを俗言りきいるといふ例なり

○ゆる　○むゆる

○おゆる　源氏手習の巻のおゆるまゝにとあり

○やちまゝ下

○こめる　万葉五ノ上うち許コ。伊イ。ふてなど別に有る外に

□こめる　□こめる　□こめれなど活きたることばもかく活く

羽の例なり又こゝろ　□　□　□こゝるこゝれと活きて　阿　行の羽なり

もおもゝべりれどこめる　□　□　□などやうの外の行ようあて

こゝけぞ此行の羽なるこゝあきこゝけし

○むくめる　こゝ系ハ活用ハ後語よむくいんと行ハ

下二段の活詞　此　□　俗言ようそこゝるといふ例なり

○あめる　○あめる　○あめる　○あめる

○いめる　○おびめる　おびめる

おもかげ　きえぬる　きえぬる　こゝろ　こゝろ　こゝろ

○あやめる　万葉八に安多流あやめくさ花たちばなと加と安要奴がう
花咲るまけ母云く又十小新古あやめの花の阿エ要奴がて
云く又十八に安由流ユル実ミハ多りぬきたく云くなどうん〳〵あ
○あやめる　落穴注りに血あやめ　松茸張りなせあやめる
こもりぐもこもりる形を行あり
○ひまあやめる　源氏帚川にあてえて寄生にひまえてまこ
業花枝流るも行り皆あてえてとのこうありて外に源氏
源こもえあばまこ波　行下二段の活うとこも思へど俗云ふ
あやめの花といふ羽也あれば其の花こそ活なるべし
○いぢめる　和名鈔に嘶和名以ハ波ユ由源氏総角りるどもあ

いでたる後拾遺集よりはじめていでたるなどはなほ
を近き世よりはいでぶひいでぶなど 波 行の四段の活用
新古今にはいでたゝぬまでもいくつもあり
○おびゆる 万葉集二に協流(オビユル)まで 源氏物語篝火より
やとおびゆれど 若菜より おびえさわぎてなどはあり
○こゆる 万葉十四よみこしのまゝの伊波久敞乃君が久由べき
○志なゆる 万葉二に交そのれおもひ之奈要(シナエ)て云々十又十九より
之奈要 うらぶれなどあり はてけ泊のこと 波 行の四段のもの
きもそふの和よいくつもあり きもそふなどあり きもそふべし
○おびゆる 字鏡に瘠豆比由(ツヒユ)とあり

○たゝゆる　万葉二りかるゝぞ波由流とよめり

○ゑゝゆる　於字集りゑハひえゝりとあり

○たゝゆる　霊異記り喚吹を保由と訓注あり

○ヨろゝゆる　出雲国造神賀詞り御若敲坐（ミワカエヽシ）　忠岑集りを原

集のたゞゝもとおゝゝヨろゝゆるゝ事の

うゝた　赤染衛門集り寄りヨろゝゆるなどゝあり

○をゝゆる　古事記中巻り御軍皆遠延而　日本紀り捧蹟など

お字をたゝよゝめゝ　法華経ぞ阿行ゝ

ゑゝ見めゞれど　日本紀りをゝたゝとやゝはゝゝけゞで此行な

ふゝゝたゝ

羅行之圖　并受るてにをはの図

四段の活

去サル釣ツル	下オル舊フル	枯カル晴ハル
ら	り	き
まんぬじでず	まんぬじでず	まんぬじでず
しるせんゆて	しるせんゆて	しるせんゆて
きちるぬなば	きちるぬなば	きちるぬなば
る	る	る
ともらしべきらんめ	ともらしべきらんめ	ともらしべきらんめ
り	り	レ
よりをくまでかな	よりをくまでかな	よりをくまでかな
亥	亥	亥
どぶぐで	どぶぐで	どぶぐで

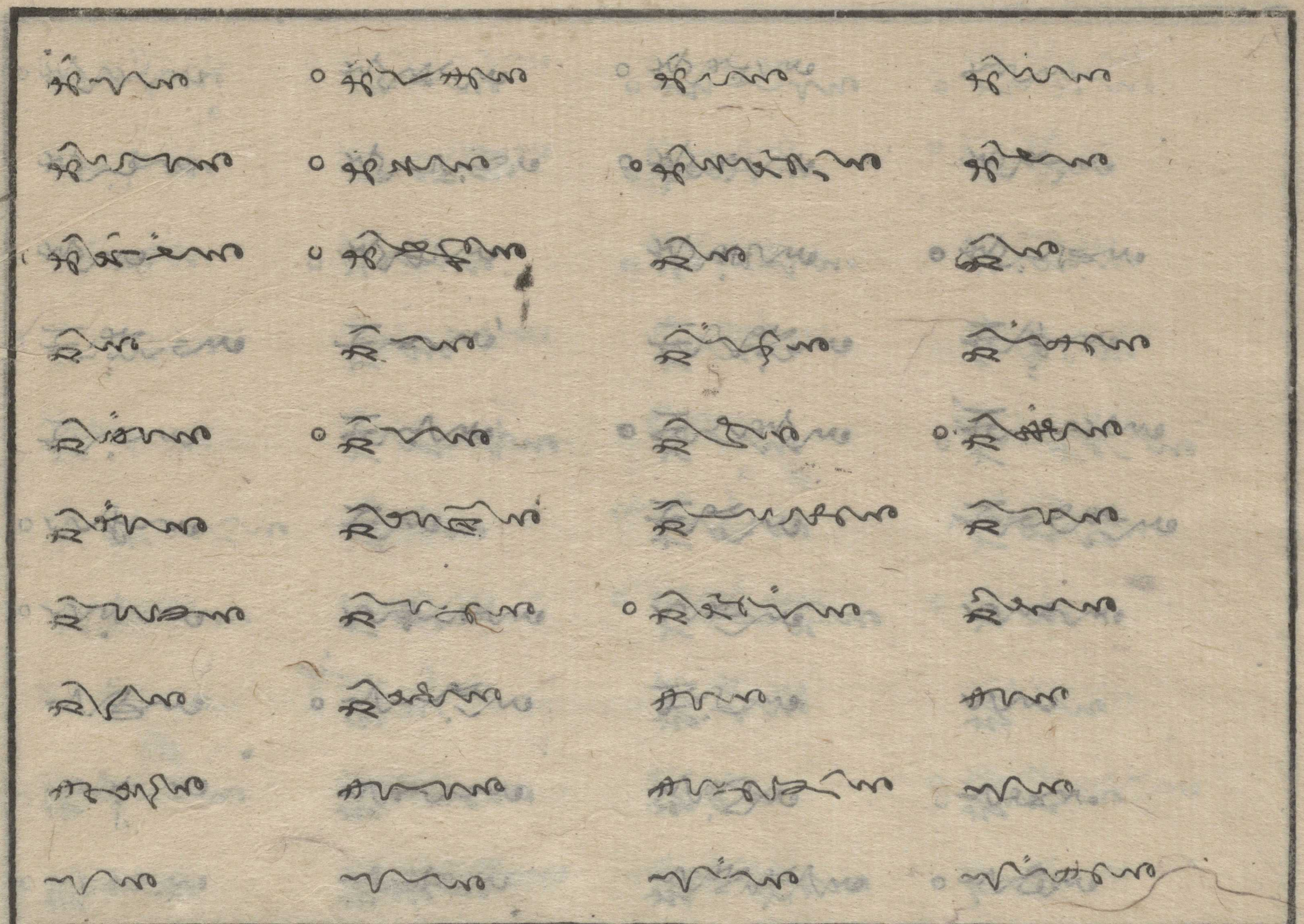
中二段活

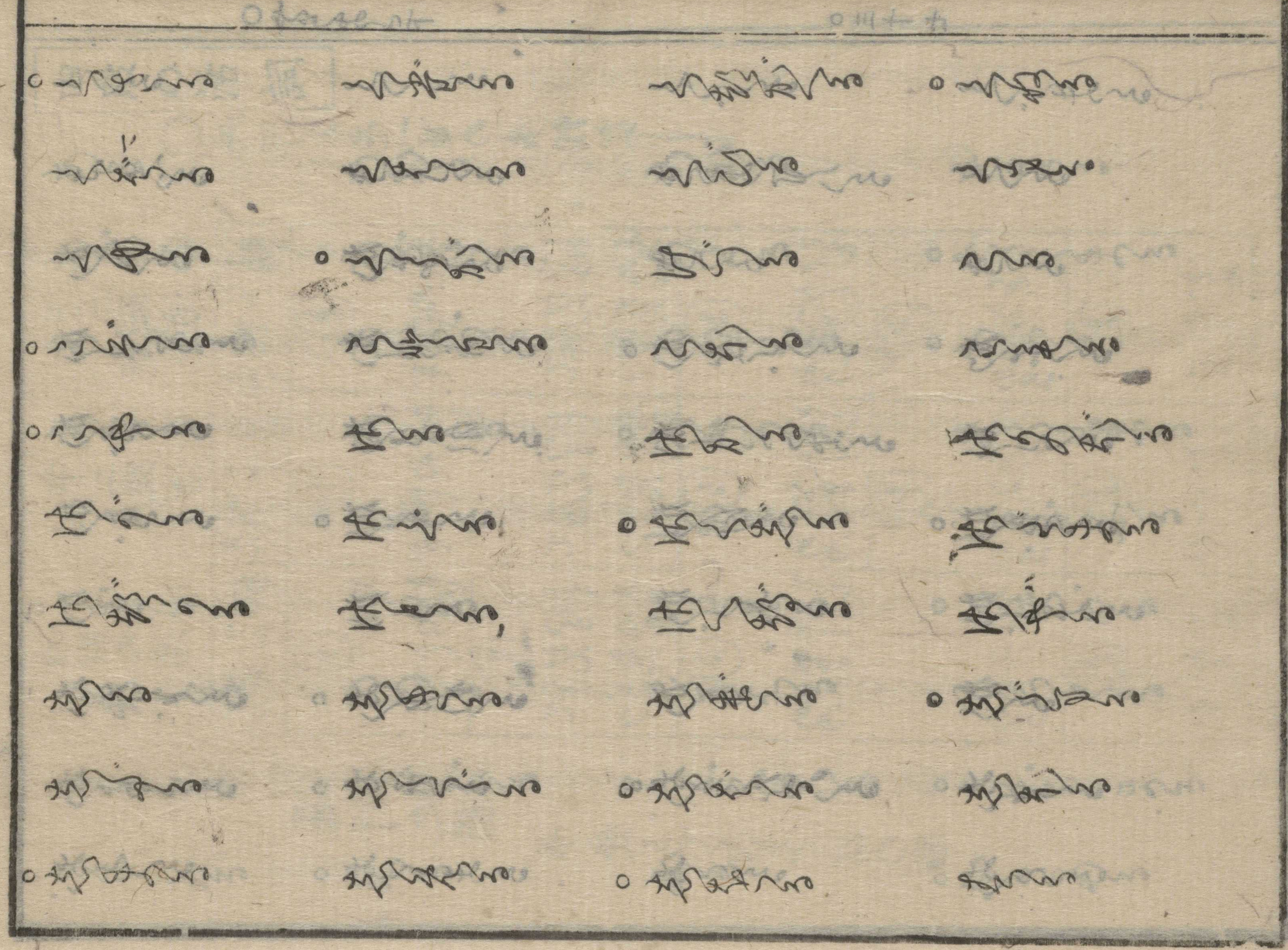
下二段活

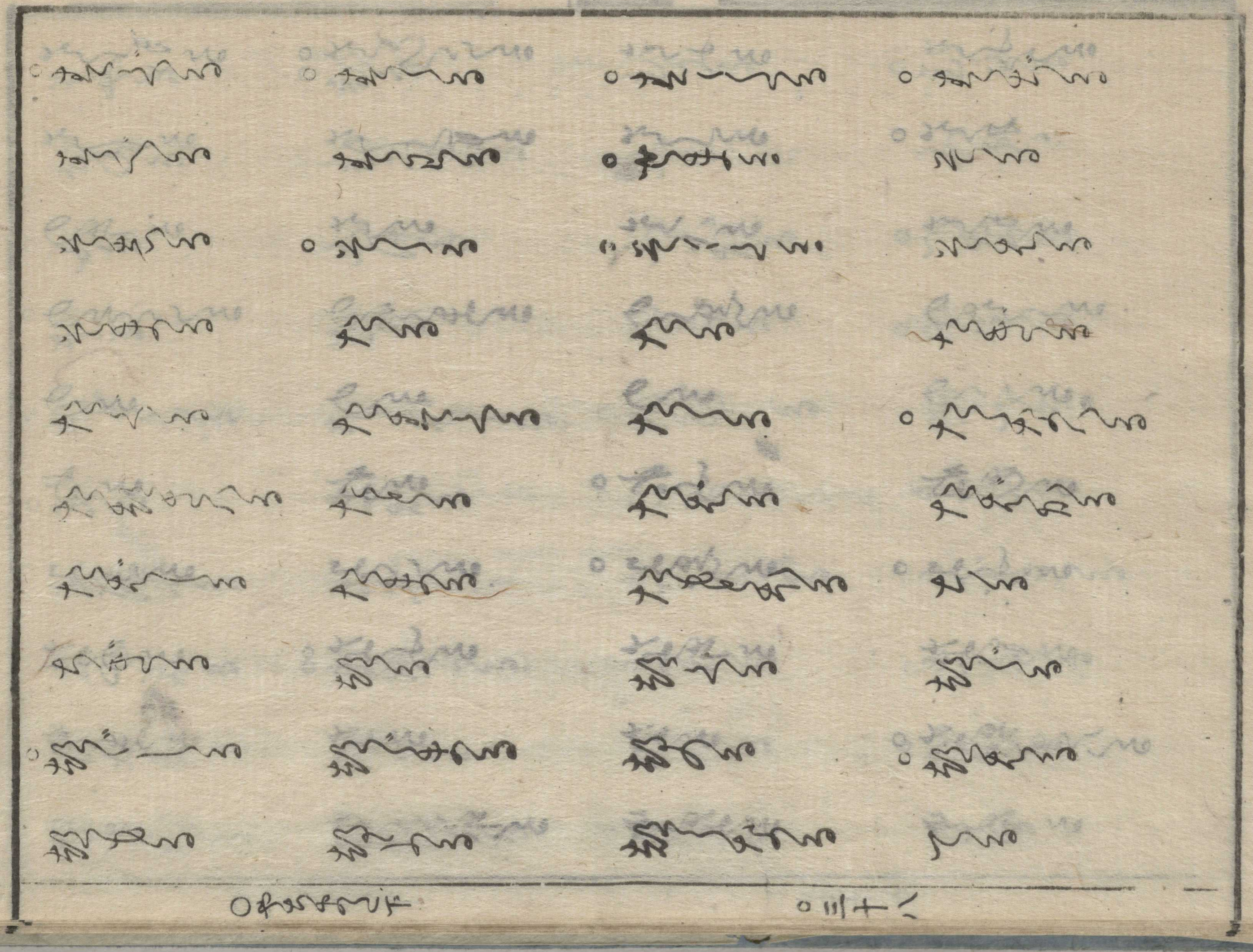
○此行るゝそ一活の活用なり

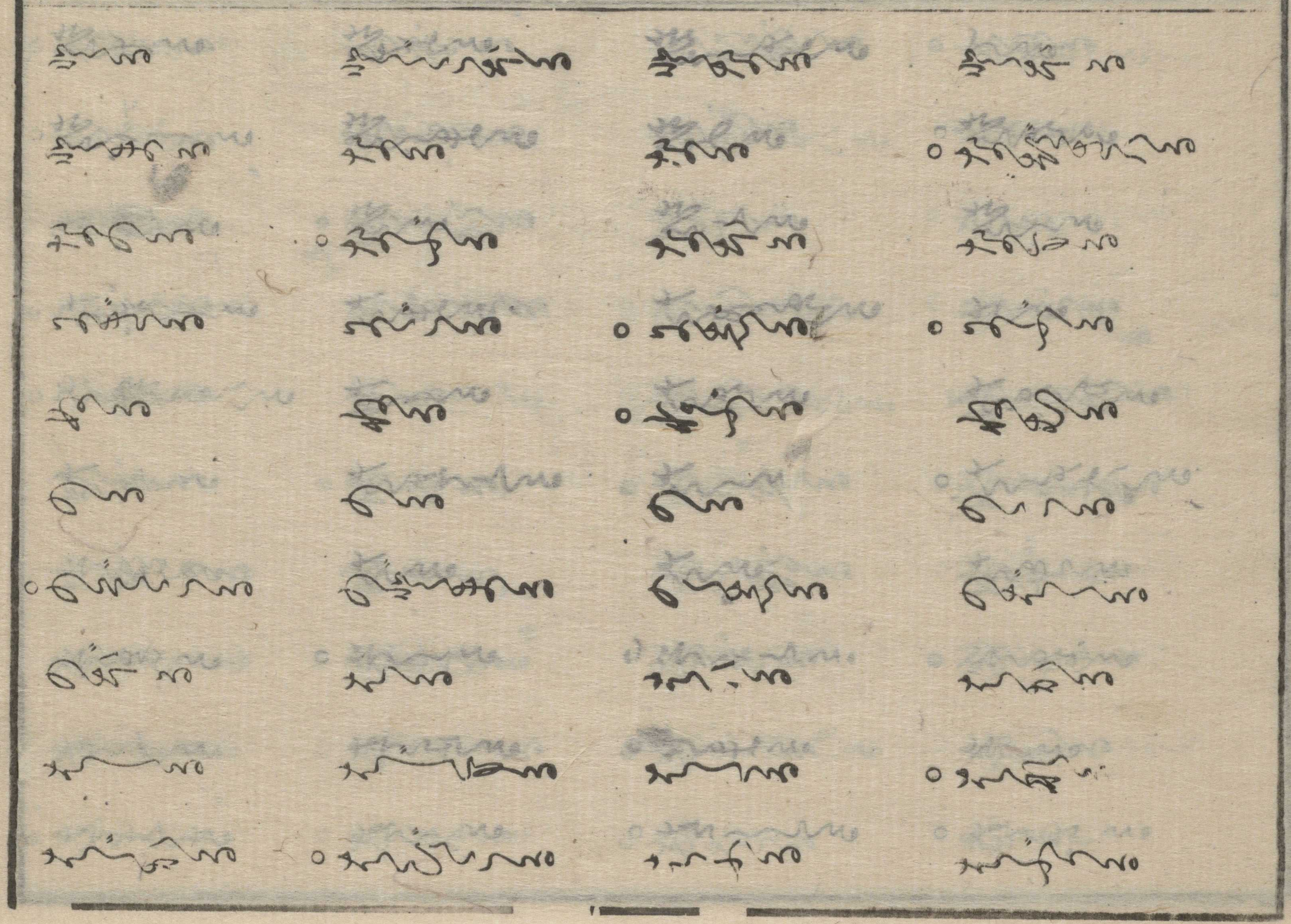
四說の發端

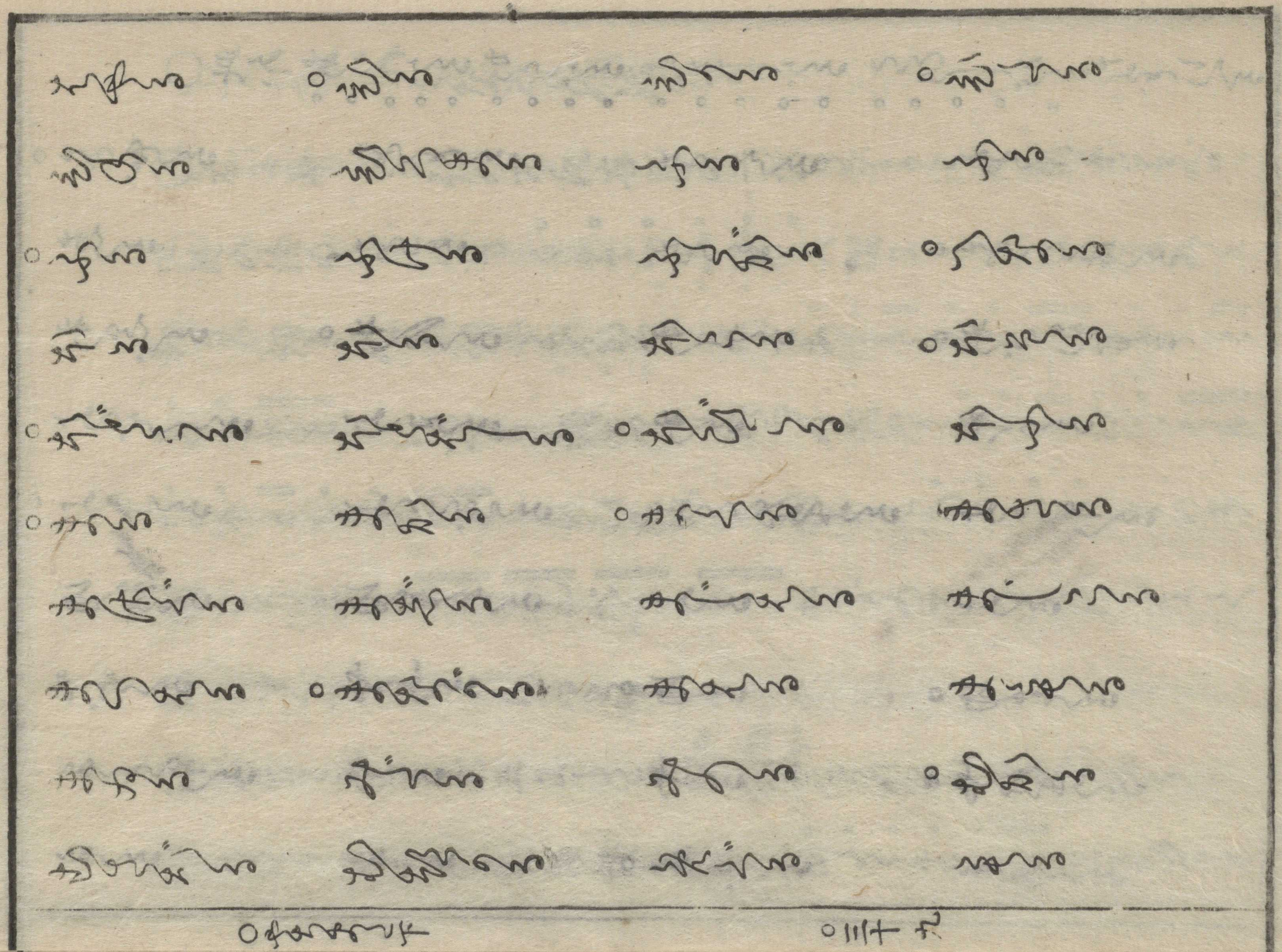
[illegible]











[illegible]

さらに変じて兵法なり

○右の挙げる詞の中に有居の二ツいまゝ所動ぐ

巳延の法の中三の言く。そつぶむる八図みそをるわく

切る〳〵詞と強く詞とかねられどあるとあるとをなど

。。。

なり此ことゝもゝきばゝなり

○あやなゝる 日本紀舒明巻に入畝傍山因以探山(アチクル)ヲ欽明巻ふ
考(カンガヘ)合(アハシ)テ古(ヒサシ)今(ヒトヲ)文字鏡に轟阿奈久苗 栄花物語うゝ北別に
常乃や流口やなどいふものどもよるゝはゝゝ関をかゝえ
などゝていとうゝ世にあれ乃ゝ乃ゝいこ法く
ふもいゝゆゝしゝなるなり

○あゞる 字鏡に焚阿夫苗 後撰集物名に衣あゞん

○あやかる 拾集に阿やりやりやもてこゝゝとあり

○いきゝる 万葉十五に伊射流火波とあり

○いつがる 万葉九に伊都我里まつせゞとあ

○くゝなハる大稜詞ゝ集侍（ウヲナハル）続日本紀ゝ末為宇古那波礼

○くゝまそくゝまる古事記下巻ゝ庭まぐめ宇受須（ウス）麻理（マリ）弇豆（ヤテ）とゝり

○くゝまのそくる日本紀允恭巻ゝ蕃息仁賢巻ゝ殖（ウヱハル）皇極巻ゝ不蕃息（ズウヱハラ）なゝどあり

○おゝぎのる字鏡ゝ賒於支乃利（おゝぎのゝ豆ぐゝとゝ）工佐日記ゝおゝぎのゝ豆ぐゝとゝ

ゝて用ゝどあり

○おゝくゝまのる源氏ゝ葉ゝおゝくゝまりゝる又格姫ゝおゝくゝまりゝる

○おゝそゝる續日本紀宣命ゝ懼理（おそり）とゝり活て世ゝ羽中ゝ爲ゝ八

世下二段の活きゝ共ゝくゝるゝとゝ古くゝまかゝ段の活きゝ用

ひゝゝり此例隠觸（カクリフリ）忘（ワスリ）なゝどあり

○おそかくる　う敷布　後陰又々のおそなるをばゞたにく

○おそかとる　万葉十六より　ふちの木にもゝ　於保登禮流とあり

又源氏東屋より　おそかるゝ八月しの月ときこゆれば

いるといふてうるとはゝ　方言の　まつう　受うる八此下二段の例より

て活をと異なるあり　習ようかくあり

○おそをねる　日本紀神武巻より　侮媚をおかねうとよめり

○かくる　古事紀上巻　哥りのまゝ　迎久良婆　下巻より　迎久良婆

賀久理　万葉十五　ぞそしま我久里　なゞ　ぬかあり　ぬは　ぬも

上りいくる　如く中昔　ふかハ此下二段の活のみ用ひ　ひ　う

○かゞる　古事紀下　光日の日賀氣流　美夜ヒカヤ　ミヤ　祝詞より

色あり又新古今集夏の歌もせの美のかげうつしてまぢかく
うもれゆくかをるまそかまをうを過るうめ

○かなぐづる　源氏箒木の巻ひきかなぐづめなどあり

○ちちる　字鏡に鐵、伊比久佐礼利（ヒクサレリ）とあり

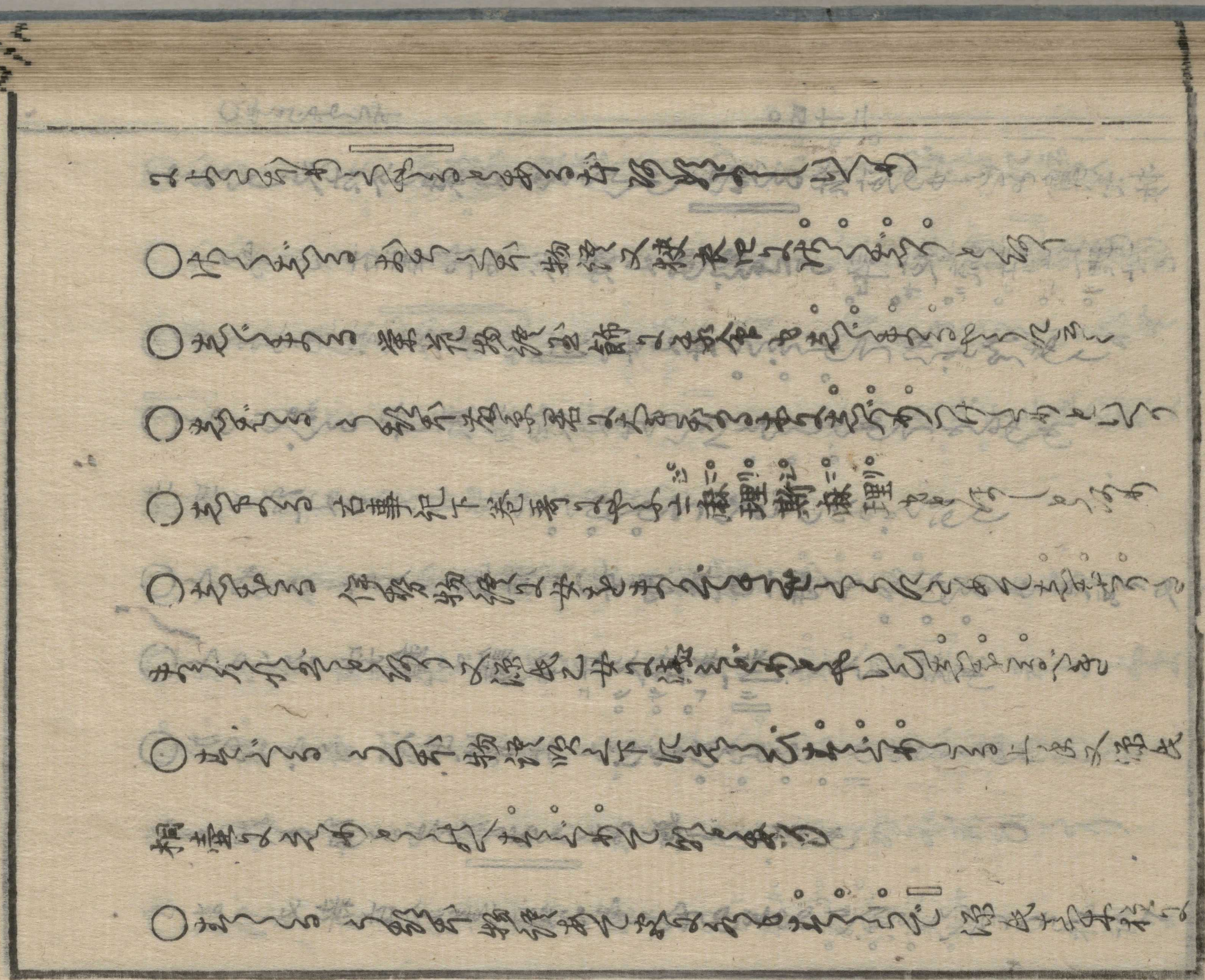
○ちねる　古今集序に女郎花の一時をちねるとも云へ又
猜略日記にまちちねりてかちちなどいへり

○ちちがる　竹取物語にせかひちがりてあり

○ちちる　紫花物語月宴に世ちぞめてかぢ物あり

○ちやる　古事記中巻歌に阿那夜（アヤ）弱流（ルル）許（コ）夜理（ヤリ）母

よもちう又古今集によちる佐夜の中山と奥義抄



鼻ぞ。あり又万葉五にかまど屋にもち須々呂比

ぞ。須々呂比ハまそゝぎなり

○まそゝぎる万葉集に意ずれど堀河百首に夏ふすたれるや

ぶたふぶぶる云ゝ同二郎百首にまたうぬぐしなどあり此

堀河百首に物白を一本にまそゝぎるとあり此下二

段の活用にまそゝぎ

○まそぎる字治拾遺物語にあり

○まそぎりまぐうるゝ

○せまるゝ万葉集に

○そゝる万葉集十七に

○そゝぎ理るまそゝぎ神樂歌

なゆとりの所をよ曽く利あげよなどゝるゝゝゝゝゝ

○そゝゝゝる おらゝゝゝ物洗りよちめそゝゝゝゝゝゝゝ蜻蛉日

記せりゝゝゝゝゝゝゝ

食豆波利おもうるに物語よりいつしかと記もわたくしバ金葉九
よりとられて物語となるべくとなり
○なづさふる 神樂哥にみてぐらになづさふものをまくる非の
ゝゝゝ

○さてある万葉二十よ波奈利蘇乃はるとなりたてとなるか
く雪降りのこも活くとるとくるめりこれも中昔よりあ世代下
二段の活きよのこゆ
○そびこる 日本紀顕宗巻りへ被をそびこれり又ぞどうれ
ゆとこそよりそり
○ひる 和名抄よ痢久曽比理乃夜万比又放屁ハ倍比流
○ひこる 拾遺集りの抄の法よひこりたる所を狭衣三り
白かねの波よせてひこれる抄の事のみどりれ元堀河百
首夏よみ月雨を日数ふるまでもわるるぐれ元の屋ハひこ
ぞりはう所どあり

○ふる　万葉二十よいそた布理　古事紀下巻よふそそを
やたくはぐ布　禮などあり　はてかくそその活びるぷれとらく
はそそそ活の格しそれも中昔よりハ下二段の活よりも用
ひそり下二段の活りそそ八そその活びそふるれそらふで宣りし
代きぐめまがひやたしなく考へ辨ふ活し
○へなる　万葉十ヌよ山川をなるよ敝奈里　などあり
○ほそる　業花物語花山よぷそらせのふとなるハ此の活ぶそ
○ほどそる　日本紀顕宗巻よ被をたがそれうとよそろう
○ほびそる　万葉十八よ雲保妣許里　豆となり
○まそる　古事紀上巻よ屎麻理ちそきそ　万葉十六よ屎遠麻礼

竹取物語より法ばくめいぶかけるふるこそをこ

○まくる 枕草子より油かいぶくあり

○まなながる 古事記上巻よたくさ麻那賀理とあり

○むかる 万葉二十より敏年加流ふねとよみたり

○もどる 宇治拾遺よのひあぐりかくまわてきのふぐさ

かぎわまもどわぶ もどうこくとの素

○やはまる 続日本紀宣命に息安麻流倍伎又休息安麻利豆

○ゆる 住吉物語より土もちゆわくとあり

○ゆはる 神樂歌より由須利あげよそくわなのりより

○よくる 源氏若紫りよくわたくしまるとあり

○日本紀神代哥よりおもて紀をかゝるかゝ部なり

ゞ内ねしいもて和素羅珥よのこゝゝぐゝも万葉二十に

和須良年砥なゞ行けてかゝ弁の言らよりむのてにを

はもとゝ受るハ図のめゝ四段の法なかぎれう此初もゆ首よりあ下

二段の法きたのこいゝめり古事記ハ妹ハ弟ハ世のこゝゝ

ゝとゝなりかゝてあて下二段の法なのめ

○日ゞかまる枕草子張りゝわゞゝのまりとゝなり

○ゝとゝぢる日本紀ゝ誘聚源氏若菜ゝとゝ紫ゞゝゝむ

の心りて演松井物語りゝとゝぢりなどあり

日本紀ゝ日ゝゝるゝとも訓ゝれゞゝゝたいゞゝう

○そもそも日本紀神武巻に望見（ヲ。ゼリ。）又眺（ヲ。ゼル。）などよめるを言め
がごとし。皆日本紀の假字よばけりよりてこゝにも然ぞあり
○万葉十三にもゝ花の末枝手須（ス。ザ。リ。）具里又十四にもゝ花ぎねらふめ
十四に羽具（ク。グ。）久毛流（モ。ル。）又宣命に部（ベ。）毛（モ。）流（ル。）などなる八ぎ（ぎ）ねらひ
もゝづもゝ花ゝ花みを迎るのゝにてゝ花沼りのうあゝびゝ乃
万葉十三の歌に思（カミ）毛（モ。）ゝゝゝゝゝゝゝゝ播の乃ゝ乃ゝを過而
とあり此例上りみるゝれゝまゝあり其處ゝよいゝるゝ如し
○ゝゝ濃て四段の活の第四のゝゝゝゝゝゝゝゝ

ざる所より此まで活用ふみてるてにをはの法もまさるなれ
ぞこゝの活用の列(ツラ)なるべし此もし三者のはしにえらもいく
わさてこれを万葉集咲有立有思有などゝ有の字をもとゝへて
かゝれてそれ意なるべしぞこゝるてにをはもまさるいくるあ
ゝ。。。

ふ。ながびかなしがあう

下二段の活詞

此を俗言に例たる

あ。あげる　あげる　あげる　あげる　あげる　あげる　あげる　あげる

あ。あげる　あげる　あげる　あげる　あげる　あげる　あげる　あげる

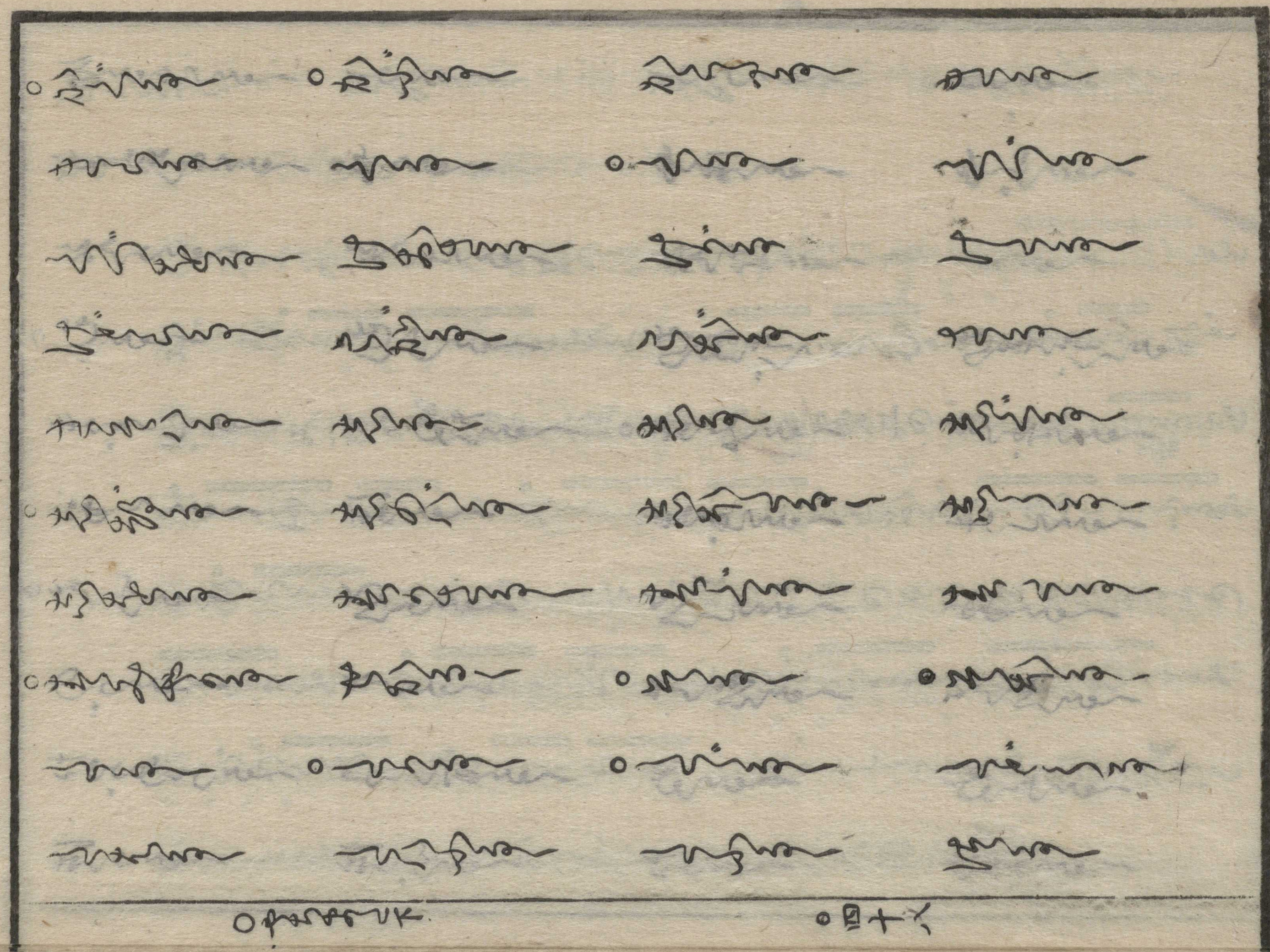
い。いる　いる　いる　いる　いる　いる　いる　いる

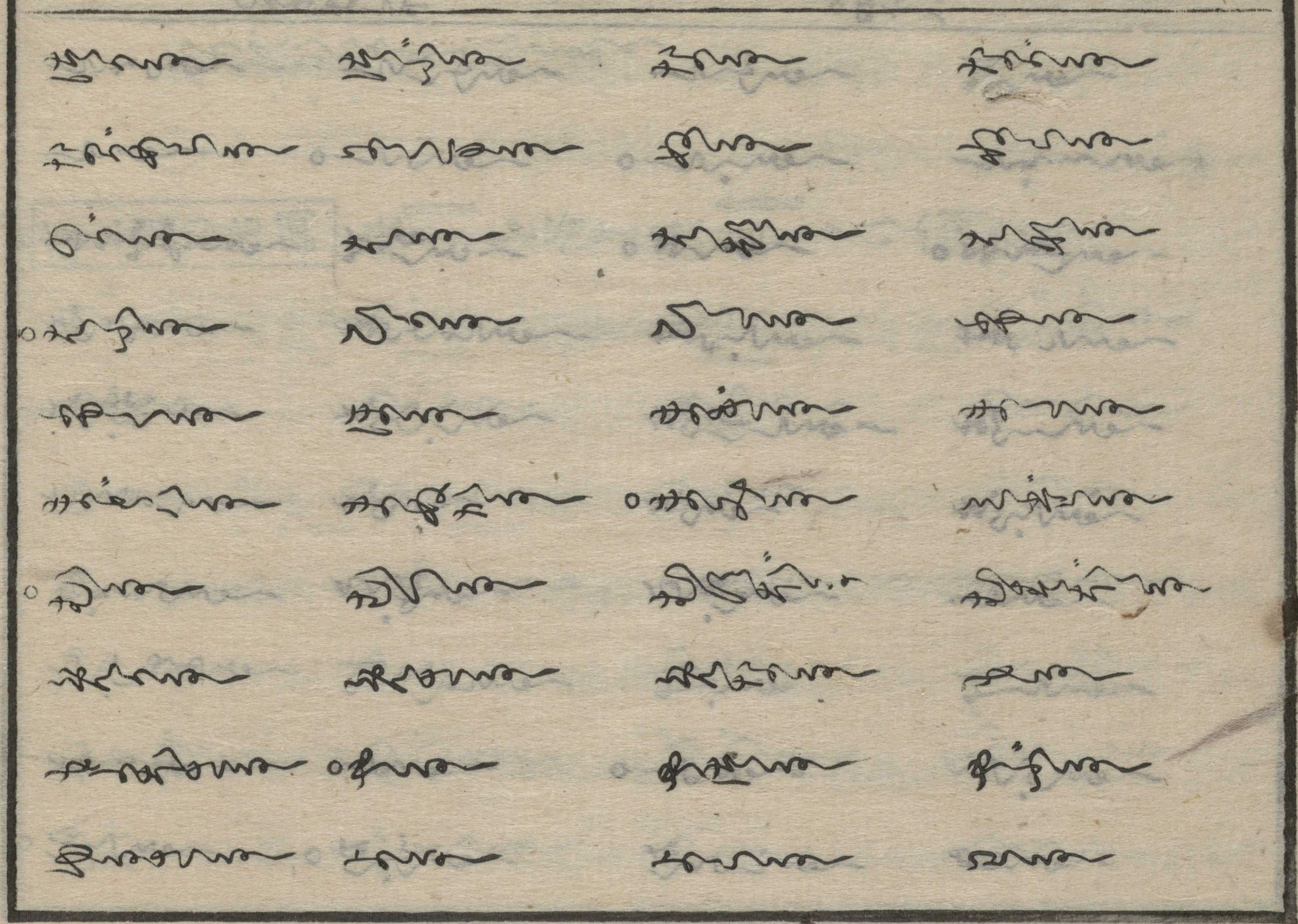
う。うける　うける　うける　うける　うける　うける　うける　うける

お。おける　おける　おける　おける　おける　おける　おける　おける

お。おける　おける　おける　おける　おける　おける　おける　おける

お。おける　おける　おける　おける　おける　おける　おける　おける





○右り挙しる外四段の活用の其第一の音よりあおぶ海とを
おどろう。||||||

○あぐらゝ　源氏物語第本文にあぐらゝ　空蟬巻
にあぐらゝけそひ　同夕顔巻
○あぐらゝ　字鏡に醍、魚肉烟也　阿佐礼太利と訓り
○おびゝゝ　物語文にはおびゝゝ　同夕顔巻に法師
はゝゝまあたゝぐられども此法師なるべし
○おもゝゝ　源氏東屋にあぐらゝ　又も書に四の
その俄に　おもとれゝる　同夕顔巻
○かぐらゝ　万葉九に舟こぐゝよりて香具禮（かぐレ）と訓る
えゝばれども此詞なるべし
○かゝゝ　和名抄に漆瘡、和名宇流之加不禮と訓り

○ちとせ　神樂哥より山人のあれよりぞ山ぶしの
物語書などにはちとせのうたり

○ちぐさ　散木奇歌集よりまもりぎれるみちのえ
ぶちなれぞはちとせる小笠よりぐれおう月日長寿よりぶるみ
ちとせのちとせ白しくの雪ちぐさ。

丹後守為忠家百そよ仲正ちぐさ紀ちのこそ日かぎそし
こぐちぐさ。

○ちぐさ　又綺語抄より乃
ちぐさ紀ちのそでなれやおもひのかりぬれぬるまぐ
四条大納言ちの枕より赤ふるのおたるもいふ明らと
ひろうれも同し初ちぐさたるもちぐさ八四時の活

ばまれりかくも法く何のやかのうんあてこそ

○まそみやうる　何花集之いしかのこそ

とあり速し炭焼とかやこそ

○そそる　夫木集春の哥にうぐいすぬまでおそとうる

○そそる　狩衣一よわひそれるけそひとそ

今撰和哥集之為真入そうぐひまその梅の花ぬ

ぞふるまそ雨なそそれてこそ鶯とまそよあう

○こそる　古事紀上巻之宇士多加礼とそう俗

と四段の法何りこいくう

○こぐそう　古事記上巻之血爛をちあえぐれ

○そふる　源氏夕顔によばれぬ霧まとある

○まみる　日本紀神代巻に血染をまつれり此ことあり

千載集によみまてこなどあり

○むる　丹後守為忠家百そに為盛いそぎ彼こもりる

ゝゝかれるとあるむれとハつねかをくいくわ

○やる　神楽歌に袖ゝやまあこ

○ひろ　物語書にひれといくるのみをて外に流

ゝゝめるあるやゝざれども此法をかるべし

和行之圖 并愛るてらもとその圖

一段の活	中二段活	下二段活
居キル	率ヒキウル	飢ウヘル　植ウヘル
ね	ね	え
まんぬじでず	まんぬじでず	まんぬじでず
しるげんゐて	しるげんゐて	しるげんゐて
ちらぬるなきて	ちらぬるなきて	ちらぬるなきて
め	め	う
ともらしぐきん	ともらしぐきん	ともらしぐきん
かなまでふをよめ	かなまでふをよめ	るるるるるるるる
れ	れ	れ
ぐ少ぐで	ぐ少ぐで	ぐ少ぐで

○此行ハそ匹段の活用ハ

一段の活詞

なる居

○和名抄に艘俗云爲流船著沙不行也又斷此間云波井流齒傷酢也などゝあるハ同きやうに異なるやうなれ羅行の四段の活詞なれとも活くゝ例なれハ流もそ

ほそもそろくゝばまでいづれとも定めがたし

中二段の活詞

此うるもと俗言なるとゝいふ例なり

○うる

○ゆきうる

○うる物語書なれなるなどいへるもこれなり

うくるうれなどゝ活くることゝなりたるもの活と云ふ

これをひきくるの云ふことを畧きたる詞とおもふ

ひきくるハ此詞よりひきいくるなり

○ひきくる 日本紀崇神巻より急居此云菟岐于と有り物語文

よ新しのゆふ外どいくるゝ云ふ新し

下二段の活詞

此くるを俗言ハゑるよりゆくる

飢 ○うゑる

植 ○うゆる

蹴 ○けくる

居 ○をくる

○くる 字鏡に饑ハイヒニ伊比尓宇くと有り於急と云ふ新し

○うゝる 伊勢物語に志賀のうゝとゝたきくゝものなゝバ狩衣ぬし

○うゝる 古事記上巻より蹶散（クエハラカシ）又蹶離（クエハナチ）日本紀より蹉跎散此云二俱穢一

難邏く箇須なゝ〻ゝはして和名抄に蹴鞠世間云末利古由とあり同し例なるをかくいひてそ也行の下二段の活用にて假名も異なるはいかゝ〻ゝ

○まゝる 延衡集よりいなかれぞ大内山のそまゝ〻今風にて

の関をゆゝらんとあるまゝるいゝるハ多し

○ひゝる 古事記中巻よゝきゝ〻斐恵泥（ヒエネ）とあり此例より活用

たるゝとあるゝんゝぐれども第四のまるよりゝ祢とゝゝる八下二段の活

の定まり形りまて和名抄に竹刀阿乎比衣とゝゝ行形もて八ゝ

[illegible]に假字のちがひあるを思ふに

[illegible]

安行よりはじめて右の挙げる詞どもは法きてのかゝれ

[illegible]

[illegible]

文化三年春三月

詞みは毎らゑかいのことゝ。歌よむ可
も。文かくゑも。はゝのみ書べる毎ゑ。ふ
くんとゝ先て。志ろいのへきゝ。志ろ
いのへありけりかゝ。よくろうえ。ゝ
人も。まゑふへ死姉毎あらさるへけ
きと。おゑろうふ尼えきゝ。或もゑ毎

恋ろく毎見志ぬ人也。何くれのことよ。
ひて。かく海ホ[illegible]思ひもふさ[illegible]ア[illegible]
てハ。思ひもまと[illegible]ひ[illegible]ま[illegible]何ふもなく[illegible]
うもることもあ〳〵ハ。春日庭。
此ひ[illegible]ふ[illegible]ともせ。[illegible]う[illegible]の書[illegible]毎。
人ホ[illegible]ま[illegible]ゑ[illegible]なと[illegible]ついて[illegible]

ある〻。引いつゝ考。調ともしたみいてお
きてるうへ。狩よく考へ正して。ナつ生ハ。
そのはう〻ゝ。秋ゝ紙ゝ。ゝ。ゝ紙ゝ。ゝ紙ゝ
なを。牡人さゝめて。ゝ丸。紙よゝみ。ふ更
かゝく人ゝ。多ゝ。ゝゝくさゝまつゝ。畑し
多ゝ狩ゝ。狩ひきゝ。かゝむゝ。およ

はゝぬもあらむとも。此やちまゝよ
ゝ
ふ
ゝ
ふ
ゝ
ゝ
ゝ

~~22402~~
22713

文化五年戊辰之春發行

江戸日本橋通壹町目
須原屋茂兵衛

大坂心齋橋筋唐物町
河内屋太助

奏州松坂日野町
柏屋兵助

京都寺町通杉原下ル町
勝村治右衛門

同 御幸町通御池下ル町
菱屋孫兵衛

製本弘所

書林

国立国語研究所
1001089356